
華の天使 月の精靈

汐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

華の天使 月の精霊

【Zコード】

Z4931F

【作者名】

汐

【あらすじ】

華が咲き、風が吹き、華が舞う。そこに居るのは1人の少女。苦難の日々も記憶を頼りに生き続けた。遠い日のあなたに会える日を夢見て…。悲しい記憶を持つ人よ。忘れてしまったのですか…。悲しみと寂しさは涙にせずに心の底へ。あなたが今幸せなら。それが私の幸せになるから。私は今日も笑顔になれるのです。

1・忘れた過去と記憶（前書き）

前の連載とは大きく変えたいと思います。＾＾
明るく・面白く・読みやすくを目標にして
頑張ります！

1・忘れた過去と記憶

田に浮かぶのは1人の少女

いつも隣にいてくれた。君は僕の生きる証だった。
大切で大切で、ずっと傍にいたかった。

淡い桜色の髪。大きな紅い瞳。微笑んだ表情がとても可愛くて、
ひたむきで無垢な心には何度も助けられたんだ。
ずっときみを守っていきたいと心から願ったよ。

君は誇り高い『華』だから。僕の憧れだから。
下を見ないで。空を見上げて欲しかった。

遠い遠い綺麗な蒼い空に

キミの手指すものが絶対あるから

「……ううう。違うよ。キミだけ……君だけがいればいいの。」

春の華。満開に咲き誇る頃。

少女の言葉が、揺れる春の空に木霊した

*

夜を越え新しい太陽が生まれ、暖かい光が地上に射した。
綺麗な空。透き通つた空気。爽やかな風が吹き渡る…

「んー。いい朝だな——！」

「つていうか！こじどこだ！！！」

青年は広がる草原に倒れていた体を起きあげ、不意に叫ぶ。
だがそれは仕方ない。

誰だつてそんな状況になつたら気が動転するだらう。

ここは思つていた世界。自分がいるはずだと思っていた場所とは
全く違う景色だつた。

青年は、はつとして辺りを見渡す。見たこともない風景に戸惑い
を隠せない。

「…あの雲 カレーに似てんな。」

・・・?

彼は現実逃避をしているのだろうか。

「あははー！ あれ ゼットークラゲにみえるー！」

1人で異常な盛り上がりつぶりを見せている。

雲は絶対クラゲには見えない。

何が可笑しいのか、幸せそうに笑つている。

ここまでで分かると思うが、この青年はかなり変つてゐるようだ。

一般人は異国に突然来てこの行動はしないと思われる。（そんな
シユチュエーション滅多にないとは思うが・・・）

青年はしばらく一人遊びを続けた。2時間経過・・・あきないの
だろうか。

そして、充分1人遊びを満喫したのか背伸びをして、今度は真剣に悩み始めた。

瞳は真剣そのものである。先ほどの表情とは似つかない表情だ。やはり先程の態度は、いきなりの事に頭が混乱していたのだろう。

「今日の昼メシはどうすつかな…」

前言撤回！彼は平常がこれらしい。

それにしても、どうでもいい事を考えてるんだな…。

彼はメニューが決まったのか、ポンと手をおいた。

「よし…」

と気合を入れて遠くに見える街に向かつて歩き出した。その足取りは軽く少年のような姿だった。

順応性があるのか、もうこの世界で暮らしそうと準備をしていた。その前に、腹ごしらえらしいが…。（こんな主人公で真に申し訳ない）

彼は賑わっている市場に着いて、買い物をしていた。

「あれだな。今日はカレーどこのなんだな…っと あ そつか…この米栽培してねえのかよ」

あいたーとも思うように額に手をあいた。

余程落ち込んでいる姿から、彼は米好きらしい。

そう、今彼は言葉も通じない国で、堂々と買い物をしている。誰からか貰つたの！？手提げのエコバッグをもつている。

そのバッグにはジャガイモ ニンジンなどカレーに使う材料が入っていた。

着々と集めているらしいが…。

どうやって買い物をしたのだろう？

次にカレー粉を買おうとしていた。

買い物方法は、ジエスチャード見事に「ミコニコーションをとつて、見事に値切る事にも成功していった！店の主人もキミには負けたよ…みたいな表情をしている。（どんな主人だ…）するとこここの世界では使えないだろう通貨なのに、ポケットから平気で代金として渡した！

それは無理だろうと誰もが思う瞬間…。

主人はコインをしばらく眺め、瞳を光らせた…緊張感が漂う…。運が悪ければ、警察行きなのでは…？
払った本人ではなく、その状況を見ていた野次馬達が冷や汗をかく…。おいおい！

「 * @ ; + - - 」（まいびーーー）

営業用？にこやかスマイル
店の主人、いいのですか、それで…。

「 ～ 」

彼はじやがいもをナイフで切っていた。
目的通りカレー作りは達成されている。

彼は以外に器用で、料理の腕も中々の様だ。りんごも兎ちゃんにしている。

カレーに使うのだとしたら、意味無いと思われる。

「どこで料理してんじや！」という人もいるだろう。

お答えしよう。ここはどこかというとキャンプ場である。
現在、彼はキャンプ場を借りて生活しようとしていた。（それは

駄目ではないのだろうか…）

「バイトも始めねえとな…」

野菜を切り終え、焜炉に火をつける。彼はふうとため息をついた。

ちょっと落ち込み気味の

姿は、先ほどのはから元気だったのかと思わせるぐらいだ。

彼は共同の洗い場で料理をしているのだが、少し離れた所に5 ,

6人の女性が

彼を見ている。

視線に気付かない彼。

女性達はこここのキャンプに泊まるうとしている友達同士らしい。じ~。

女性達の目に映る彼の姿は、さうさらの黒髪、鋭い瞳、高くすらつとした体型。

少し複雑な事情をもって苦労をしている青年に見えるらしい。まあ、あながち嘘ではないが…。

「やっぱ、米は売つてなかつたなあ…これで、米があればぜつてえうまいのになあ…ま 仕方ない カ、今は我慢だな。」

異国に来て初めて後悔している言葉、なんて情けないだろつ。しかし彼の言葉はもちろん彼女達には分からぬ。

「#v@~…*」（人生に悩み耽つてゐる所がかっこいい）

これこそ知らぬが仮である。

彼に惚れてしまつた、行動派の女性1名が、青年の近くに接近…!

「+*」（あの…）

「ん？」

青年はカレーをプラスチックの皿（キャンプ場で借りたもの）に自分の分を盛り付けていた。（特盛り！） 彼は瘦せている割に大食いらしい。

彼は近づいた女性を見て、

「ああ。はら減つてんのか。」

彼はお皿に盛り付けスプーンもつけて、女性に渡した。下心はないらしく善意らしい。

「？」

思わず受け取ってしまった女性は

ペリットお辞儀をした。その姿を見た青年は屈託のない笑顔を見せた。

「厳しくてもホームレスとしてお互に頑張ろつなー」ぐつと親指を立てる。勘違い

「……」

笑顔もまたかっこいい！

えつと、彼の国の挨拶では親指を立てて挨拶するのかしら……でも返さなかつたら失礼よねつ！

「#＄！（ありがとうございます！）親指を立てる！俊足で走り去る。（何故？）

「おー！はえーな」

俊足の彼女を見て、呟いた。

（この国でもホームレスつているんだな…よし！俺もがんばろつ！）勘違い

彼は心の中で呟いた。

* * *

へえー。バンガローって以外と広いじゃん。
ランプをつけて、布団を敷いてつと。

ふあー。なんか今日色々あつたなあ…疲れたぜよー。
バイト探さなきやな…金もやばいしな。
でも、本当にポケットに金が入つて良かつたなー。すっげーラッキー。

俺つて何しに来たんだ…ここまで来てまで。

何か忘れてる気がすんだよなあ…。ま いつか。

彼に出会うため。

桜吹雪が舞い 華の天使が舞い降りる
…

1・忘れた過去と記憶（後書き）

お読み下さりありがとうございますーー！
謎が多い物語になると想います。
ですが、読みやすい文章で書けるよう頑張ります。
華天使は次回登場します。

2・桜の少女

青白い霧に包まれた世界。そこには白い花が咲き乱れている。微かな風が辺りを吹き渡り、風に揺れる小さな花を、月は照らしていた。

水は一切濁りがなく、月を映し出していた。

湖に映る月はとても美しく空に光る月は神々しい光を放っている。この世界にあるのは静寂と悲しみ。

その気持ちを唄つ1人の少女。

長く真っ直ぐな蒼い髪。月に照らされると透けて光り綺麗な水色となる。

長く細い髪は風にさらさら靡いてる。彼女の瞳は紺と空色のグラデーションのような色で、

瞳はすぐに涙をながせそうなるの瞳。潤いのあるピンク色の唇は、微かに動き音を紡いでいる。深き悲しみの詞を歌い、音色は声でないような癖の無い透き通った音。

風に音をのせて、響き渡る。遠い遠い空に向けて

*
*

ぽかぽかと暖かいバンガローの中で青年は月を覚ました。

「ふあ～つと」

起き上がつて欠伸をする。布団から体を離し、軽い準備運動をする。

「今日は待ちに待つた体育祭だぜー。」

彼は寝ぼけているらしい。口元が異国の事は忘れているようだ。

「玉入れ頑張んぞー」

その年になって、その競技があるのだろうか？
声が親父っぽいですな。個人種田で一番をとつてやるぜー…という
のならまだ分かるのだが…

「…ん？ なんだこれ…！」

彼は目を丸くした。おや、やつと気が付いたらしい。自分がどんな
状況にいるのかが。

「テレビがあんじやん！」

そこなのか！ といつかやつと気が付いたのかー中々大きいサイズの
テレビなのだが。

「ラッキー」

そう言つて彼はテレビのスイッチを入れる。ポチッと。 分かり
もしない言葉が次々に耳に入る。 「…」

彼はテレビのチャンネルを持ったまま、呆然としている。

「あ そつか…俺。」

下を向き俯く。

「帰国静雄だつたんだ…」

それをいうなら帰国子女。あとキミはそんな設定では無いです。

「これから頑張んねえとな…」

彼は表情を暗くして、声のトーンを低くして呟いた。

「おれ、帰国静雄として生きてくよ…」

故に！ そんな必要はないよー…といつか静雄つて誰だ ー！

*

*

「よひじりせつ」
彼はバイト先を見つけたようだ。話も通じないのでよく雇われた
なあ：

肝心のその仕事は…

「どうぞ。手紙です。」

郵便屋だった！！この国では排出ガスができるだけ出さないようになりますがない。道路も無い。ほとんどの人は歩きか1輪車らしい…。自転車は無いのだろうか。

それに携帯電話も普及していない為、手紙で相手に伝えるらしい。彼の今日のお届けする手紙は白い袋にひとつさり入っている。その量ははんぱない数だ。

彼はその袋を担いで走っている。

常人だつたら歩くことで精一杯だろう。

彼の大きな白い袋をもつて走っている姿が、冬のあの人を連想させる。

ヒント！煙突から不法侵入するあの方ですヨ

「次は…東区2丁めか」

そして彼は軽くスルーして走り出した。

「」

鼻歌を歌いながら彼は走っている。もちろん郵便屋は他の他にもたくさんいる。

この国での郵便屋は持久力と地理能力が無いと駄目らしい。

「この分かれ道どっちだつけな…」

彼は分かれ道に遭遇した！

1つは今までと同じような街が続いている道。

もう1つは薄暗い森への道…狼の遠吠えも聞こえてくる。子供だ

つてわかるさ！

大丈夫大丈夫… つてええ！あいつ森の方向へ走つていった！なぜ
だ つ

彼は方向音痴らしい つ！

「ん？何が聞こえたよ？」

…氣のせいですよ やつと追いつきました。ふう。

彼は今まで通り何の迷いもなく森の奥深くへと進んでいる。ふく
るうの声も聞こえてくる。

「ん ミスつたか？」

あはは。ちょっと遅いっすね。

彼は後ろを振り向く。

「！？」

彼は驚きを隠せない。

なぜなら、ずっと一本の道しか通つていなかつたのに、後ろを
振り返るとつに道が分かれていたからだ。

心臓がどんどん早まる。

彼は現実を知る。

自分はこの森で迷つてしまつた。

ここから出る事が出来るのだろうか。

不安が心をよぎる。

「どうなつてんだ？ これ。」

ナレーショーンとは裏腹に彼は平然としている… おいおい。

彼の苦痛な叫び声と同時にもう一つの声が聞こえた。

「？ 僕。叫び声なんて…」（強制終了）

「郵便屋さん…」んばんは

彼が声の方向へ体を向けると、桜吹雪が舞っていた。桜の木なんてどこにもないのに。

目の前には1人の少女。

桜色の髪がとても綺麗で、紅い瞳によく栄える。大きい瞳を彼に向け、につこり笑つて彼を見る。彼はその笑顔に見覚えがあつた。

遠い記憶にあるあの子。その子がいたから今…

「お手紙…貰えませんか？」

大人っぽく、可愛い澄んだ声。その声に彼は体をびくっとさせた。自分より随分背の低い少女がてこてこと自分に近づいてきた。上目遣いで少女は彼をじつと見つめる。

綺麗な顔に青年の心が少し揺れる。

「…あの方、手紙つていってもさ。キミ宛の無いんじゃ…」

そう言いながら、彼は袋から多数の手紙を出した。その中からこの子宛のを探しだした。

「キミ 名前は？」

ちらつと少女を見る。少女は、はにかみながら視線を青年に向いた。

「当ててみて下さーい！」

「へ？」

「えへへ」

初対面の相手に自分の名前を当てさせるなんて・・・。

「…小悪魔！？」（馬鹿）

だが、言葉とは正反対に天使のような無邪気な笑顔を浮かべている。

その笑顔に逆らえない彼。

「・・・（汗）」

すっかりペースを狂わされたらしい。

「ん そうだな・・・。」

「ここにこしながら待つて いる少女。

「ん 」 ハリハリ>>^

。」 ハリハリ>>

4時間後：

「：負けました。スイマセン。」

ついに青年は諦めた。ふうとため息が漏れる。

「謝らないで下さい…ですが、あの何か浮かびませんか？
めげてない少女。

「：そんなに聞きたいの？」

冷え切った目で少女を見つめる。

自分の名前を当ててもらいたいなんて、不思議な子だなー。と思
いながら。

「：はいっ！ 聞きたいです」

まだまだ元気な少女。諦めが悪いのか、粘り強いのか。

「じや…は」

「花子はちょっと手抜きです」

青年は肩を落とした。

「：予知能力？」

「：はい」

「：へー。すげーな。」

その後、彼は腕を組んで本気で悩み出した。
名前…名前…名前…？ 彼は身震いした。
何かの呪縛から解放されたように、自分を取り戻し、当たり前の
事に気付いた。

彼は彼自身の名前を忘れてしまっていた。

住んでいた所も…。

覚えている記憶は、この異国に来てから。

そんな青ざめた青年の表情を少女は見ていた。不思議そうに悲しそうな表情で…

彼の様子がおかしかった。震えていて血の気がないぐらい白い顔。

「何なんだよ。」

彼は手を力一杯握り締めた。

「何でだよ…。」

青年の瞳から涙が流れた。

その時、白い小さな手が彼の拳に触れた。

「…何」

触れた手を反射的に離し、彼は少女の顔を見た。少女は切ない表情を浮かべていた。

「俺…何してんだる。」

小さく彼は呟いて、手で目を擦つた。

「何か変なとこを見せたな…ゴメンな。」

彼は精一杯の笑顔で話しかけた。

「何か俺おかしいんだ。記憶も何も無いしさ。何でここに居たかも分かんないしさ…もうどうすりやいって話だよなー！」

彼は一人話し続ける。

「…ふ、ははは」

彼は感情が堪えきれずに、吹き出すように笑つた。

「…って何言つてんだ。俺。初対面の子にさ。」

空元気になつて、へへっと笑つた。

彼は取り乱した事を無くしたいようだつた。

軽く彼は自己嫌悪をしながら、青年は下を俯いた。

微妙な空気が2人の間に流れる…。

その空気を遮る様に少女は口を開いた。

「その気持ち…分かるような気がします。」

少女の言葉に青年は顔を上げた。
自分の不確かで分けの分からぬ気持ちが理解…共感してもらえる
とは、思いもしなかつたから。

「不安も…もどかしさも全部解決します。大丈夫です。…大丈夫
ですよ。」

青年を落ち着かせるように優しく言った。

「え…ど。実は」

少女は照れながら指を動かして、拳動不審に言った。

「私…こう見えても未来予知能力と過去透視能力があるのです…
っ！」

「へ？」

突然の言葉。

そんな力つて存在するのか？と彼は思つた。
でも、まあ今俺がここにいる事だつて不思議なわけだしなあ…。

彼は少し驚きながら、精一杯に話す少女の姿が面白くて、ふつと
笑つた。

その後青年は、頭を搔きながら笑つて言った。

「へえ、マジで。」

こくこくと少女は頷く。

「何か…サンキュー。元気付けてくれてんだろ。」

「あ…。」

「お前の透視能力で見えるような未来になつてつといいけどなー
青年の自然な笑顔に少女は心が動いた。

でも少女には分かる、青年の心が暗闇に堕ちているのを。
自然のよくな、無理している笑顔。他人に隠している心を。

救いたかった…君の心を

「…私は分かるのです…っ！あなたの名前を。あなたが誰なのかも。」

何かを伝えたい事があるのか、早口になりながら必死に喋りだした。

「記憶は…ゆっくり思い出せばいいと思います。」

少女の綺麗な紅い瞳に涙が溜まる。
何故そんなに、彼に構うのだろう。

「焦りは禁物です…。」

跪いている彼の頭を少女は撫でていた。
優しく・・・愛しく・・・。

この子の存在は昔から心の支えだった。

青年は幼い頃に戻ったように、少女に強く抱きしめられていた。

「え…」

「…あなたのお役に立ちたいです。」

2・桜の少女（後書き）

お読み下せりてありがとうござりますーー！
次回は蒼い髪の女の子が出ます。

3・月光と華音

少女が青年を抱きしめている。

青年は咄嗟の少女の行動に驚きの表情を隠せない。
声も出せずに、時間は経つ。

少女が居るからだろうか、この森に綺麗な桃色の花が咲き乱れて
いる。

風が吹き、花が揺れ、桜吹雪が舞う。その景色は息を呑む程美しい。
かつた。

単なる偶然なのか、それとも必然だろうか。2人が出会ったのは。

「はなひと華人様…！ 何をなされているのですか？」

急に響く、透き通つた綺麗な声。だがその声は少女の声ではない。
少女の声より、大人びた声…年上のように。

その言葉を聞いた少女は、体をびくっとさせ、青年から体を離した。

「ふう…。やっと解放」

少女から解放されてやっと声を出した。

顔は赤く、呼吸が荒い。急な展開に汗をかいたらしい。

「焦りました。華人様を見失つて…。」

その声の持ち主は、蒼い髪の少女。少女といつても桜色の髪の少
女よりは背が高く、外見年齢は15歳ぐらいである。

瞳は紺と空色のグラデーションで、長く細い髪が風に揺れている。
細く白い体。意志の強い瞳。整つた顔立ち。

桜色の髪の少女と並ぶと、美少女が2人。

このままコニット組んだら絶対売れよな…。と青年は心の中で思
つた。

「…恐れ入りますが、あなた様は華人様とどういったご関係でしょうか？」

澄んだ声で蒼い髪の少女は、青年に問う。怒りを隠しているような表情である。

強い瞳を青年に向かって。

「俺？」

左右前方を振り向きながら青年は言つ。惚けてる分けではないらしい。

彼は素がこうなのだ。

「はい。…そうです。」

「ん…。多分無いというか、俺は覚えていないんだ。」

「そうなりますと…華人様の…」

少女は言いかけたまま、理解したように1人で頷いた。

すると、一旦目を瞑り、瞳を開けた。

その瞳は先程とは違く、優しい瞳になつた。

「先程は失礼しました。私は藍依アオイと申します。華人様のお供をさせて頂いています。」

すんなりと大人びた声で言つた。

礼儀の良い子だなと彼は思った。

やつぱりこいつ時は自己紹介するものだよな。とは思うもの

「えー俺は」

30分経過・・・

しようがねえ！この際、嘘も方便だあ！

「静雄です。」

「それは嘘だと思います」

「ばらすなあ！」

桜色の少女…華人に的確につっこまれた。

「…とまあこんな感じなんすよ。」

適当にごまかして、頭を搔く。

「長い自己紹介ご苦労様です。」

くすっと笑つて、藍依は言った。

「つまり…記憶がないのでしょうか…？」

藍依は問う。

「ああ。 そ うなん よ」

何だ。 話 分かるじ ゃん。 最初から 言つべきだつたな。

すると 藍依は 珍しいものを見るよ うに、俺の手に 觸つた。

「ん？？」

手のひらをじつと見つめる。

手相でも見てんのか？

「ふむふむ、よかつたですね。」

「何が？」

「華人様からの贈り物ですね。」

*

*

記憶喪失の専門病院に俺は連れていかれた。

良い病院を紹介してくれるとさ。

んで隣には2人の美少女が待合席に座つてゐる分 けで…。

「あの人…」

「えー…」

「ロリコンか」

「一 股…」

いや。俺の彼女じやないからな！

見られて いる視線がなんか痛いし…。ま 気にしてもしょーない
けど。

これが例の華人さんからの贈り物らしい。

前までは「* ¥」だつたのが、ちゃんと言葉が分かる。

すつげー便利なんだけど、今の状況の声はあまり聞きたくない…。

あともう一つ。藍依からなんだけど。悪い気もするけど、診察料とか払ってくれるらしい。
ま、ありがたい話だし、甘えさせてもらいつか。サンキューな、藍
依。

それにしても、通る人男女問わず2人を見てくんない。すげーな。
こりゃ。

看護士さんもこっち見てんぞ。

『…違います。あなたを見るのです』

華人が彼にひそひそと話しかけた。

「は？んな分けねえーつて。」

笑いながら手を振る。

「つて心読むな！」

本当に心読めるんだな・・・。

軽く華人をペチペチと叩く。

「やめろよ」

俺がそう注意すると少し、しゅんとしたようだつた。

「えへへ

藍依を見ると、お行儀良く座っている。

大人びたクールな表情。悲しげな瞳。

そんな姿を見た彼は、彼女に話しかけようと試みる。

「あのさ、

「？　はい。」

「藍依って何歳？」

「…15です。」

彼の年の基準とこの国の年の基準は同じくひいらしこ。

「俺ついくつに見える？」

「華人様から聞いた方が確かだと思いますが…」

「藍依の口から聞きたいんだよ。」

「…」

ん？顔真っ赤。

ヤベ！何か俺ヤバイ事いつちまつたか？いや！別に藍依と話したいだけであつて、いやらしい意味じゃないぞ！

藍依は顎に手を当てて考える。

しばし沈黙。

（何かここまで悩んでもらうと悪い気がすんな…）
ちよんちよん青年の服の裾を引っ張る。

「き、決まつたよ」

「おお。何々！」

藍依が耳に口を近づけきた。

「十八」

そして綺麗な声で答えた。

「ふーん、そつかそつか。ありがとな。」

しーん・・・沈黙再臨

「なあ、藍依」

「…？」

「俺に名前付けてくれよ、俺名前忘れてっからさ～。何かと不便だろ名前ないと。」

藍依は困った表情を浮かべた。

「はあ。ですがそれでは…あなたが犬みたいですね。」

ふつふつふ！藍依をからかってみつかな！

「ん。じゃ犬でいいよ。藍依ご主人様。」

俺はにっこり笑った。

作り物の笑顔じやなくて自然な笑顔。
こんなに綺麗に笑える人がいるのか。と思えるぐらいの笑顔だつ

た。

つられて藍依も頬を緩めた。

「では、考えとき…ます。」

藍依の表情が柔らかくなつたのは、誰も気付く事はなかつた。
しかし、2人を見て少し悲しげな表情を浮かべた少女。
1人で遠い昔を想いながら、瞼をゆっくりと閉じる。

「もう、キミじやないんだよね」

きゅっと拳を握る。

「私の名前なんか、覚えている訳ないよね…」

暗く切ない声。

「うん、分かつてゐる」

過去を封印する、私の心と一緒に。
永遠に、凍らせるんだ。蘇らなこよう。

思い出と記憶は、もう変えられない。変わらない。
あれが結末…最後のページなんだ。

終わつてしまつた、何もかも。

物語の続きは始まらない。

3・月光と華音（後書き）

お読み下さりてありがとうございますーー！
次回も宜しければ見て下下さい。^ ^

4・天使との関係（前書き）

タイトルを変えさせて頂きました。
あらすじも変えてみたので、注目して頂けると
嬉しいです。

4・天使との関係

華人の顔が暗く、藍依は悩み耽っている。宣告された本人は全然平気な顔でいる。

なぜそんな状況かというと、青年の記憶喪失は重症の病もあるらしい。

青年と藍依と華人は病院から出てきた。青年に宣告された病気、記憶障害・短命症。

その名の通り、記憶は抹消され死までの時間が短くなる病気。正式にいうとこれは病気ではなく、呪いらしい。

つまり、記憶喪失の原因は、何者かによっての呪い。

封印解除の魔法をかけてもらえば、呪いは解けるらしい。

「しかし、この国では魔法が禁止されている。なので、ここから遠い東の国に居る魔術師に、封印解除の魔法をかけてもらえばいい。そうすれば、記憶が元に戻る。」

と病院の医師に説明された。

「……」「……」「何でそんなに暗い顔してんだよ。」近くの自動販売機の前で3人は立ち尽くしている。「お前らが落ち込むものじゃなくね?」その時に藍依が瞳を強くして言った。

「私達には確かに関係ないかもしませんが、私も…華人様も不安なんですよ!」

言葉を詰まらせ、瞳は潤み始める。「…あなたの事が心配なんです。

」
その言葉を聞き青年は意表を突かれた顔をした。「へ?…あ わり。なんかお前らまで巻き込んで。嫌な思いさせてさ。」少し暗い顔で、気を遣つて話した。

「俺達つてさつき会つたばかりなのにな。」「・・・」「罪悪感を少し感じながら青年は言った。

「…何でこんなに関わっているんだろうな。」

「俺なら平氣だからさ。何か色々ありがとな。華。藍依。」そして屈託の無い笑顔をみせる。

「…」「…」沈黙する2人の少女。

その空氣を遮るよつに、青年は近くにある自動販売機で異国の通貨で買おうとする。

おいおい。そのお金で買えるのか…?ピ

はは。やっぱり買えないようでしたな。残念!その硬貨はもう少しこれでは使えないな。

『当たりが出たからもつ一本選べるよ』

…。オイオイオイ!…恐るべし自動販売機!…恐るべし幸運!

「お ラッキーじゃん。」そう言つてもう一本ジューースを選ぶ。

ガジャヤン・ガジャヤン・ガジャヤンツ!開け口からジューースを取り出す。青年の手には、サイダーとオレンジジュース100%とコーラがある。

「ほい。今までのお礼。」2人の頬に冷たいジューースを付ける。

「冷たい…」藍依は言つ。「全然冷たくなさそーだぞ。」

「そんなこと…ない。」藍依は目を逸らす。「ふ そつか。」彼が笑うと、

藍依は手にサイダーを握った。

「ほい。華も貰つてくれ。」「…」「貰つてくれないと頭に乗つけるぞ。」

「…」「?」彼は華人の顔を覗き込む。

華人の瞳は凍つていた。時が止まつたよつ。「どうした…?」「少女の綺麗な瞳に一筋の涙が流れれる。

「また…どこかに行つちゃうの?」

「1人で抱え込まないで…」

少女がその場でしゃがみこんだ。しゃがんだというより、倒れたに近い動きだった。

「華人様…っ」藍依が近寄る。華人は気を失っているようだった。

「すいません。華人様を宿に連れて行きます…っ」藍依は焦つていながら的確な選択を選んだ。「あなたも…来てもらえないか？」

「華人様がこんな状態になつたのは、あなたに会つてからです。」ズキッと彼の心が痛む。

「あなたには記憶が無くても、華人様はあなたを…覚えているのだと思います。」

「きっと、とても大切な人だつたんですね。あなたが。」

藍依の言葉が一つ一つ胸に刺さつっていく。血の気が一気に引いた。瞬時に遠い過去が蘇つてくる。酷い頭痛と目眩がした。

辛く暗い過去。痛い痛い。

「…やめろ。」桜の髪の少女 風が舞う庭「やめろ…っ」

彼の視界に懐かしい風景が、ぱっと浮かぶ。

綺麗な蒼い空と桜が舞つてゐる。そこには少女がいつもいて、自分を待つていた。

ここが自分の居場所だった。幸せの音が響いていた。

白い翼の天使・桜吹雪に・雨が強く叩く・視界は真つ黒で

何もできない

紅い雨

されるがまま

枯れる叫び声

一瞬にして視界は真っ暗になる。
この世界の音が聞こえる。

現実に戻っていた。藍依が優しい顔で、こっちを見ていた。
「あなたにとつても辛いと思いますが…お願いできませんか。」
華人を背中に背負いしながら、身を屈めて彼を見た。

「宿に行きましたら、華人様と話してくれませんか?」
「あなたの過去にも関係していると思います…から。」

そしてにこつと笑った。彼はその笑顔に救われた気がした。

「…ん。分かった。華と話してみるよ。」彼も精一杯の笑顔を見せ
る。

彼は一步一歩着実に歩く、 真実の記憶に向かって

4・天使との関係（後書き）

お読み下さりてありがとうございますーー！

彼は郵便屋として働いていたのですが、手紙の袋はどこへ？と思つた方もいらっしゃるかと思います。すいません。後々書かせて頂きます。

次回も宜しければ見て下さい。^ ^

5・冷たい手

月が空に昇る頃。涼しい風が窓から部屋に入ってくる。

ここは街の宿。小さいベットの上に桜色の髪の少女が横たわっている。

少女…華人は、先程まで苦しい表情を浮かべてたものの、今はすっかり熟睡している。

その隣で、蒼い髪の少女…藍依が、安心したように少女の髪を撫でている。

風が吹きカーテンが揺れる。心地良い風が、肌に触れる。

電気をつけてない、薄暗い部屋の中で、月明かりに照らされる少女達は、とても美しかった。

静かで、穏やかな雰囲気が漂う部屋で、藍依は窓から月を見上げた。その日の夜の月は、仄かに光っている。月は雲と重なり、月光が夜空に滲んだ。

仄かな光を放つ月は幻想的で、その美しさは絵画では到底表せない程だった。

藍依は月を、ただただ見つめた。月に吸い込まれるような瞳。

そこが自分の故郷であるかのように…懐かしい表情を浮かべた。

しかし部屋の部屋には2人だけだった。彼の姿が見当たらない。

宿に行きましたら、華人様と話してくれませんか？

あなたの過去にも関係していると思います…から。

今から少し前…少女達と一緒に彼は、宿の前までついて来たのだが、そこで立ち止まってしまった。

「…覚悟する準備が必要…ですよね。」藍依が彼を見て言った。

彼はゆっくり頷いて、「心の準備ができたらここに戻つてくるから

…。」と小さく呟き

颯爽とどこかへ行つてしまつた。

どこかで自分と向き合おうとする覚悟をしているのか…
それとも苦しい記憶に田を逸らして逃げ出してしまつたか。

* * *

日が落ちて、人気のない公園に彼は居た。その公園には大きな湖があり、

自然が溢れ、土地が広く、青茂つた芝生が公園の一面上に広がっている。

その自然に触れると、誰もが癒されてしまう程、安らかで住民の憩いの場所となつている場所だ。

大きな湖の前の芝生に彼は、寝転がっていた。

彼の髪と芝生が重なつて、草の露が髪についた為か、髪の毛先が濡れていた。

彼の黒髪は、風が吹くとさらさらと揺れた。

目を瞑つたまま、ただその場に居た。

「何かよくわからんねえのに…」

「何でこんなに過去を知るのが恐いんだ…？」

がぐがぐと体が震える。心がすかすかして、寂しさが心を溶かす。

彼は手を田の上に被せて、誰にも見られないように一粒涙を流した。

「…情けねえな。俺」

*
*

力チャ…宿のドアが開いた。藍依はドアが開いた音で目を覚ました。

「来てくださつたん…ですね。」寝ぼけた声で藍依が呟いた。

そして、壁に寄りかかっていた体を起こして、彼の方へ近づいた。

「よかつた…です。」彼の冷たい手を握った。あまりの手の冷たさに朦朧と

していた意識が目覚める。「…寒くありませんか？」藍依の質問に返答が無い。長い沈黙が続いた。

「寒い…のかも」ぼそっと声が漏れる。きっと感覚が麻痺しているのかとも藍依は思い、

彼に暖かい毛布を被せた。そして自分のバッグから熱カイロを取り出して、彼の手に付けた。

「…熱い」あすみません。」藍依はそれををぱっと彼から離した。

「感覚が麻痺している様です…。体が温まるように、温かい飲み物買つてきます。」そう言いながら立とうとしたが、手を引っ張られた。「…え」体制を崩した藍依は

彼とぶつかり、倒れた。床の上で2人倒れこむ。藍依は上半身を起こして、青年に布団を掛けた。彼は目を瞑っている。彼は寝てしまつたのか、気を失つてしまつたのか。

そして彼のあまりにも冷たい手を握った。「熱…奪つて下さい。」

しかし、時間が経つにつれて冷たくなる手。どうしようもなく、た

だ傍に居る事しかできず」にいた。

「どうしよう…」掛け布団を何枚も掛けた。しかし、彼の手は凍つたままだ。

顔色も青白く、血の氣を全く感じない。

「死んじゃう…の？」彼の顔に触れる。「起きて…。起きて…。」

体を揺する。

「…・・・」「どうしてやが」

風が吹き、華が舞う。

そして彼女は目覚めた。彼を助けるために。桜色の髪を風に靡かせて。

「私に…任せてください。」
真っ白い翼を広げて。

5・冷たい手（後書き）

お読み下さりありがとうございましたーー！
次回も宜しければ見て下さい。^ ^

6・天使降臨

風が凍る、冷たい部屋

その部屋には、泣き出しそうな少女と倒れている青年が居た。桜色の髪の少女は、今までベットで睡眠をとつていた。

そして、おそらく今も…。

蒼い髪の少女…藍依は窓側を、時が止まったように見ていた。窓側には、月明かりに照らされている、翼を生やした少女がいた。それは正しく華人が翼を生やした姿だった。

一瞬の桜吹雪が舞う

急な突風に藍依は目を閉じた。しかし再び開けるとそこには少女ではなく、長い髪の女性がいた。

藍依の瞳に映るのは、桜色の長い髪、着物のような紅と白の衣装、紅い瞳…。

服も外見も違う。だけど

「華人様…？」

そういうわざを得なかつた。その女性は明らかに華人に似ていた。藍依の位置からは、ちょうどベット…華人は見えなかつた。普通は今も寝ているはず。

けれど、目の前にいる真っ白い翼の女性は、華人にそつくりだった。

「…話は後にしましょ」

桜色の髪の女性はそつまつと、部屋の中央へと進み、床に膝をつけた。

彼女は、彼に掛かっている布団をどかし、彼の腹部に手を伸ばした。

「…あなたがそう望むのなら 翼を汚して祈りを空に届けましょ」

そう静かに言い放ち、綺麗に気高く歌いだした。

「この…歌は」藍依は天使に見入つていた。

空遠くまで響き渡る歌声。切ない悲しみの旋律。

華が咲き乱れ・風が吹いて舞い上がり・空が揺れて希望の光を射し

天使がその歌声を 祈りにして神に届けるのでしょうか

眩い一瞬の光が彼の胸を刺した。重く厚い光がずんと胸にのめり込んでいく…。

「何なの…？」呆然と藍依は見ていた。見たこともない現実を目の当たりにしたように…

桜色の髪の天使は、くるつと振り返り藍依をじっと見つめた。振り返る時に揺れる長い桜色の髪の美しさに、藍依は見とれてしまつた。

「この者の病気は治していない…。一時的な発作を直しただけだ。」
歌声とは違い、低い優しい声で天使はそう言った。

そして、一瞬の内にして飛び去ってしまった。藍依の目に映つたのは、白い羽だけだった。

喜びには悲しみが 幸福には犠牲が 付き物だから
そんな囁きが藍依の耳から離れなかつた。

* * *

「ん…」朝の光と風が部屋に入り込む。彼はここはどうだったかと、ゆっくり思考を動かす…。気が付くと腹の辺りになにやら重みが。視線をそっちに向ける。

蒼い髪。「藍依…か」藍依はまだ眠っている。安心したようにすやす

すやと眠っている。

気が付いたら眠ってしまったのだろうが、じつやら彼は腹枕にされているらしい。（う…動けねえ）と体を硬直させながらも、彼は藍依の

頭を撫でた。「…ありがとな。」床には冷めた熱カイロが置いてあつた。

* * *

ふきふき ふき。 ふきふき。 「よしつ…と」

只今、窓磨き中。 まあ。なぜかとこうと、この宿は格安の牲もあつて

掃除は、使用者がするつづー訳なんだな。本当は俺用にもう一つ部屋を借りてくれたんだが使わなかつたというオチで…。

「私…お支払いしてきますので、お掃除お願ひできますか？」
ああ。もちろんと言つたものの、この部屋全然綺麗だぜ…。
少し床に鳥の羽・窓に花びらがついてるくらいだな。
ん? 鳥の羽? ? ? ま いつか。

それにしても、藍依が起きた時の反応はめっちゃうけたな。
珍しく慌てる姿が可愛かつたな。あれ。

…とまあ。ぶつちやけ言つと華^{はな}と話す時間をくれてんだろうな。
氣を遣つてゐんだな藍依は。

掃除終了!!

よし、華は宿の外庭にいるみたいだし…話つけてくるか。

6・天使降臨（後書き）

お読み下さつてありがとうございます！！

華と天使は同一人物なのでしょうか。

藍依は、天使の歌に聞き覚えがあるようですが、
と言う所がこれから話のキー・ポイントだと
思います。

次回も宜しければ見て下さい。 へへ

7・一息の間

青年は廊下を出て、歩き出した。部屋のドアを閉めようと、取っ手に手を近づけた。僅かだがその手は震えていた。

その手とは裏腹に、彼の表情は自信に満ち溢れている。

意志の強い目・口元はにっこり笑っている。

どちらが本当の彼の姿なのだろうか。

* * *

3人が泊まつた宿は、新しく綺麗な建物で、人気がある宿だつた。宿の中にはレストランもあり、様々な味の料理が楽しむ事ができる。もちろん各部屋にジャグジー・バスとトイレが付いてある。部屋は使用者が軽く掃除をしなければならないが、お手頃価格で泊まる事ができる。

その宿の人気の理由の1つが、宿の外の庭である。

そんなに広くは無いのだが、草木が茂つており、太陽の優しい光がさんさんと

降り注いでいる。庭の端の方には、桃色・白・水色などの様々な色の花が

咲き誇つていた。花壇の近くには、落ち着いたカフェがあり暖かい飲み物やお菓子

軽い食事などが楽しめる。

そのカフェの白いベンチに少女…華人はちょこんと座つていた。

「よつ」

そう言つて彼は右手を上げた。華人は軽く会釈をして、にっこり笑つた。

まだ朝早いので、周りには3、4人しかお客様はない。

そんな中、周りを気にする訳でもなくいつも通りの声の大きさで話しがけた。

「俺さ、さっき持つてた金を両替してきたから何かおいらるか。」

彼の異国と思われる通貨をこの国で使えるように、両替したようだ。

「これ、見たら華^{はな}どんな顔すつかな」

軽く笑つて、彼の持つている例のエコバッグから財布を取り出した。

財布を開けると、札束がぶわっと入つていて。

「……。」

「俺つてどこの王子様だったんだろうな。」

にっこり笑つて華人を見た。

「何か奢りますよ。お姫様^{はな}」

その答えに応じるように、華人も幸せそうな笑顔を浮かべ大きく頷いた。

「華^{はな}。何がいい?」

目の前には、クレープのようなお菓子がずらつと並んでいる。

そのお菓子は、粉とミクルという木の実を混ぜ合わせ

薄くこんがりと焼き上げた皮に、お好きなものにくるんで、できあがり!

：という簡単かつ美味しい、この国での定番お菓子メニューの一つである。

目の前に映るガラス越しのお菓子を食入るよつに、華人はじつと見つめている。

フルーツが盛りだくさんのもあれば、チョコレートやマシュマロのトップピングが、かかっているのもある。

「……！」

華人はきらきらした瞳で、どれにしようかと真剣に悩んでいた。

真剣に悩む姿を、微笑ましく見守りながら彼は言った。

「食えるなら何個でも買つていいぞ」

「ふにえつ！－！」さりきら200%の瞳で彼の方向に振り返る。なんだなんだその可愛い声は！と内心思いながら、

「ほら、決めうつて」華人の子供っぽさに心のどこかで安心していだ。

「あ……。」

華人はふっと目を逸らし、急に目を細める。急に何かに醒めたような表情をした。

頬を少し膨らませて、寂しさが一瞬表情に過ぎる。

そして真っ直ぐな瞳で青年に問う。

「私…。やっぱり、子供に見えますか？」

凛とした声が風に鼓動して響く。

彼の心が一瞬空白になつた気がした。ふと何かを思い出す。思い出してしまう。

ぐつと目を瞑つて、拳を強く握つた。何故少女の一言にこんな心が乱されるのだろう。

なんでこんなに何かを思い出したくないんだろう。

焦る心を隠しながら、彼は口を開いた。
無理に笑つて。

「その言い方をするつて言つ事はも、華は子供じゃないのか？」

「・・・」

「見かけは子供！頭脳は大人！つて感じなのか？
腹に手を当てながら笑つた。

「・・・馬鹿にしますか？」

落ち込みながら小さい声で呟いた。

「あ、悪い」

「・・・こえ、馬鹿にする程が正常です」

そつと黙つて寂しく笑つた。

「？」

「でもな俺、華を見ているとさ」

彼はそういうて恥ずかしそうに頭を搔く。

無いはずの記憶。

でも、その中にある不確かな記憶。

その記憶だけが彼がもつて居る一つの手掛かり。

「俺の記憶と重なる所があるんだ・・・」

彼は、ゆきりと正面に話し始めた。

7・一息の間（後書き）

お読み下せりてありがとうございますーー！
やつと青年が心の真実を語り始めます。
次回も宜しければ見て下さい。^ ^

8・消えない傷

2人はお菓子店の前で少し話をして、お菓子を買った後、歩き出した。

黒髪の青年と、桜色の髪の少女・華人は、宿の外庭のベンチに座った。

青年は浮かない顔をしながら、むすつと座っている。

華人は買つてもらつたお菓子を、大切そうに持つていた。

「…いただいても、いいですか？」

大きい瞳で、青年をじっと見つめる。

「…。おう。もちろん」

目を逸らして、彼は言った。彼の頬が少し赤い、どうかしたのだろうか。

はむ　はむ　はむ…

「にー　」

華人は最高の幸せの時間を過ごしているみたいだ。…何故に猫語？
その姿を見て、悶えている人間が1人。

「…やべえ

顔を隠すように、バッグにうつむせると、誰にも聞こえないような声で、ぼそつと言つた。

先程から観察してみると、彼の行動がおかしいではないか。

華人はお菓子をちまちまと食べていた為、結構時間がかかった。

「じちそつさまにやー」

(華人です) おいおい。キャラ変わつているやんけ。もしかすると、幸せな時に猫語になるのだろうか。

「お菓子ありがとうございました。」

標準語に戻つて、にこりと笑う。

華人の笑顔に戸惑つたのか、彼の表情が一瞬硬直する。

「…はあー」

すると、青年からため息が漏れた。疲れた時にでるため息では無く、何かに迷つているような深いため息だ。

「??」

華人は不思議そうに、彼を見つめる。見ています光線を浴びている

彼は、光線を放つた本人に、顔を向けた。

ぱち

視線がぶつかる。「機嫌な顔で華人は彼を見ている。すると、華人は真剣な眼差しで話し始めた。

「あの…記憶の人の人って誰なのですか?」

突然本題になつて少し驚きながら、彼は視線を落とした。

「・・・」

「分かんねえ。……ただ、その記憶だけは、名前を忘れた時から覚えていたんだ」

「すんげー鮮明にさ」

華人はベンチに座り直しながら、彼の言葉に耳を傾けていた。
彼は自分の記憶を言葉にした。長い話だったが、華人は少しも飽きたそぶりを見せずに
彼の言葉に聞き入つていた。

「その時の記憶の俺はさ、悪ぶつてるというか、かつこつけててさ、たくさんの仲間とつるんでるんだ。色々めちゃくちゃな事を乐しがつて

やつてたよ。…そいや、警察から逃げる毎日だったな。

けどな、理由は分かんねえけど、段々人が離れていくてさ、結局は仲間全員に見捨てられるんだ。

んで、はぶられた俺は、家に帰りたくねえからさ

いつもの場所に帰るんだよ。暖かくて綺麗な光が刺すとこそこは、風が舞う庭なんだ。

すっげー広い庭で、気持ちいい風が吹いててさ。

俺は風が舞う庭って呼んでるんだけど、本当は誰かの家の庭…なんだ。

その家人達は、昔から俺に親切してくれたんだ。んで、そこには俺と同い年ぐらいの

女の子がいんな。そいつはさ病気もちで、学校はほとんど休んでてさ、

友達がいないらしいんだ。だからそいつと友達になつてくれつてそいつの母親に

よく頼まれてた。けど俺は絶対一ヤダつて言つて、断つてたな。

俺が口が悪くても、そいつの母親はいつも優しくしてくれんのな。旨い飯も作ってくれるし、暖かい布団で寝させてくれた、俺を家族みたいに接してくれていた。

そんな人達に甘えて、俺は普通に生活してた。

そいつとも結構話をしたな。すげー変な奴だった。

いつつもにこにこしててさ、俺が何をしても、びびんないんだ。

俺がいろいろしたから、そいつの気に入っている人形を破つて捨てても

怒りもせず、泣きもせず「…キミのお望みのように」つて寂しく笑

つて言うんだ。

親にも話さなかつたんだと思ひ。俺は全くそいつの両親に叱られなかつた。

俺はそいつをモノ扱いしてた、俺のストレス発散人形だつた。

随分酷いこともやつた。それでも俺の心は満たされなかつたけど、でもそいつはさ、俺がどんなに傷付けても「…キミが望む通りに」つて言つて
傍げに笑うんだ。俺が割つた高いガラスのコップも、自分が割つた
俺が壊したもの全てそいつが片付けるんだ。

これでもかつてぐらいやつたぜ？でも全然へこたれやしないんだ。

はつきり言つて、俺はそいつが嫌いだつた。何良い子ぶつてんだ、
気持ち悪いって、吐き捨てるように何度も言つた。
けど駄目なんだ。

あいつは寂しく笑つて「そつか…ごめんね」つて言い続けた。

俺はあいつを認めたくなつた。良い子がこの世に存在するのが嫌
だつたんだ。
良い子の存在を認めてしまつたら、俺が劣つてゐる事を認めること
になるから。

俺が駄目な奴だから、父さんも母さんも俺を捨てたんだつて。
そんな事絶対認めない。「この世に良い子なんて居ない。
この世に生きている人間、全員駄目な奴なんだ。
俺は別に劣つてゐる訳じやない。

俺が捨てられたのは父さんと母さんの性だつて何度も自分に言い聞
かせた。

あいつに怒つてもらいたかった。もつと醜い所を見せて欲しかった。
あいつは綺麗じやないって堂々と言いたかった。だからそいつと言つたんだ。

「…お前は綺麗じやねえよ。良い子ぶつてんじやねえ。
気持ち悪いんだよ。とつとと失せり…」 つて

そしたら、「やつ…だよ。私、綺麗なんかじゃなによ」

「良い子でもない…。」

ただの あなたの道具ものです

・
・

それが嫌なんだよ

もつとびびつて泣いて喚いてどうじょうもないくらい濡れて滑稽な
姿みせて見ろよ。

お前がそんなんだから、俺はいじめたくなるんだ

お前が汚ければ、お前の事、痛めつけなくてすむのにな…・・・

お前つて馬鹿だな

「…。」

「道具なら本望だよな」

俺は、ポケットから切れ味の良く鋭い刃物を取り出して、そいつの首に近づけた。

8・消えない傷（後書き）

お読み下さりありがとうございましたーー！
次回も宜しければ見て下さい。^ ^

9・罪の深さ

刃物を首に突きつけられる少女。

俺は本気だった。本当に殺してよかつた。…それぐらい俺は壊れてたんだ。

他人に刃物を首に突きつけられる感触つて分かるか？

今までの苦痛が全部幸せに思えるぐらい。血の気が失せて、体が震えて、何でもするから何もしないで下さい！って情けないこと堂々と言えりと思ひざ。

それぐらい死は恐いって、俺は昔…経験してた。

俺は狂氣の目であいつを見た。

死に怯える情けない姿。生きたいってすぐる欲望。

やつと見られるんだって、震えながらあざ笑つてたんだ。

・・・けど駄目だった。

あいつの目は、いつもと何も変わつていなかつた。

ただ真っ直ぐなんだ。

死んでも構わないというか、死を恐れていない目…なんだ。

それを見た俺がびびつてさ、力が抜けて、刃物を落としたんだ。

俺は、あいつに覆いかぶさるような体勢だつただけだな、何が起きたか分かんねえ内に、吹つ飛びながら俺はあいつから離れたんだ。

がくがく震える俺にさ、追い討ちかけるよつな事するんだぜ？

そいつが立つて、落ちている刃物を拾うんだよ。

俺は殺^やられると思った。

・・・

だけどな、そいつは刃物を俺の手に握らせたんだ。

「キミが実現したい事…叶えてください」

そつ言つて、にこつといつもみたいに笑つた。

俺はようやく普通な思考が戻つてさ、人を殺すことが、
どれだけ重い事、危ない事つて分かつたんだ。

何かもう、涙が止まんなくてさ、全部を吐き出すように叫んだな…。
そいつは俺を見て、抱きしめたんだ。

ただ優しく、俺という存在を受け止めてくれたんだ。

・・・とまあ記憶にあるのはこんな、情けない話なんだ。

* * *

「苦しい記憶…話して下さつてありがとうございます。」

華人は、彼を見つめてそう言った。

彼は、華人に見とれた。

大きな紅い瞳、桜色の髪、にっこりと笑う笑顔。

「やっぱ似ている」

彼は、ぼそっと呟いた。

「？」

華人はそんな彼を見て、きょとんとしている。
すると、華人は頬を緩ませてさりげなく笑った。

「そうそう俺さ、ずっと気になつてたんだよね
不意に彼が明るい声で喋りだす。

「？　はい。何でしようか？」

「華人はなびとつて本名、なのか？」

彼の表情は明るく、質問に深い意味はなさそだ。

だが、華人の表情は固まって、少し申し訳なさそうな顔をした。

「…いいえ。本名ではありません」

「へえ。」

「企業秘密なのです！」

人差し指を立てて、ぴっとポーズをとった。

「企業？」

あつと驚いた表情を華人は浮かべた。

「言つてません…でしたっけ？」

華人は少し悩みながら、話しだした。

「華人…について…」

* * *

「…とようするに華人は、世界中に花を咲かせ、自然を守る団体つて事か？」

「はい…そして私達は、世界中に花が咲く日を夢見て、旅をしてい るのです！」

きらきら、いきいきと話す華人は、いつもより元気に見えた。

「…でも本名を隠す必要は無いんじゃね？」

彼は、そういつたごく普通な質問をした。

華人はつと笑って、腰に掛けていたベンチからぴょんと飛びはねて、芝生の上に足をつけた。

そして、手を、彼の方向に指し示すように向けた。

「あなたのお名前は…どなたがおつけになりましたか？」

「う…っ。俺の名は分かんねえけど、まあ、普通は両親がつけるよ な。」

「両親とは何ですか？」

「何つて…」

ん。悩む彼。彼は何処まで深い考えを巡らせていくのだろうか。

「人。」

おっと！普通な返答出ました！

「ということは、あなたのお名前は人がつけたものですよね。」

「ああ」

「では、これはどなたが名をつけましたか？」

「そう言って、右手で空をさした。

「人…じゃね。」

「そうですか。では、あれはどなたが名をつけましたか？」

「今度は、花壇の花をさした。」

「名つていうか、花の種類は人が名付けたな。」

「では、あのお花とその隣のお花の名はありますか？」

「どんどん不思議な質問をされ、戸惑う彼。

「わかんね。つけてあるのかもしれないし、ないかもしないな。」

「…どなたが？」

「人…」

…ああ。そういう事かと彼は理解した気がした。

「人に呼ばれる名は無いって事か？」

華人は首を傾げて笑顔を見せた。^{かし}

「それに花には1つ…1人がありませんから

1つの種で複数の花が咲いたら、名はどうなるのでしょうか…」

だから、私達は全ての花を…

‘華」と呼びます

そして華人は、華と同じ存在です

名前はいりません…」

キミ 名前は？

当ててみて下さい

彼は、華人と初めて会った日の事を急に思い出す。

「あれは、私に名前があつたら、どうなるかなと思つただけです。」

質問する前に、華人は答えた。

「おい。心読むなつのー」

彼は困りながら、軽く肩を叩く。

「えへへ　すみませんー。」

舌をだしながら、くすくすと笑つた。

「何か華つて不思議な能力あるよな…。」

私は…こう見えても未来予知能力と過去透視能力があるのです…

つ！そ・いえばそんな事言つてたな…。

「あれつて本当なのか？」

「はい？」

「今度は心読んでないのか…」

「能力の事は、秘密です」

「…結局読んでいる訳ね」

「ゆーびんやさーんの落し物」

「？」

「拾一つてあげましょ」

いーちまーい　にーまい　さーんまい　よーんまーい

華人がくるつと回ると、不思議な事に手紙が空から降つてきた。
それを見事にキャッチする華人。

今、華人はどつさりと手紙を抱えている。

「…ありがとうございます」

すげーなと思いながら、仕事を忘れていた自分に呆れていた。
袋を受け取り、よしと覚悟を決める。

「行って来る！　じゃ」

ひゅーんっ！

「こんな展開ありなのでしょうか……？」

困り果てる華人。確かに、あの人に空気を読んでもらいたいですね

そこに、ちょうど良く 藍依参上！

「華人様：あれって」

「郵便屋さん見事復帰みたいですよ」

「えつ！」

こんな別れ方つてありますか！？
いまだに名もない主人公。走り去る！

9・罪の深さ（後書き）

お読み下さりありがとうございました！

ついに郵便屋さん復帰です！

：読者様は覚えていらっしゃったでしょうか。

彼が郵便屋だったという事に…

作者自身忘れかけていて…（滝汗）

藍依や華とわかれてしましましたが、

これからどうなるのでしょうか？

次回も良ければ見てください。＾＾

10・別れ・再開

だだだだツツツ　　！

只今、今作の主人公が、ありえない速さで走っています。
こりや。赤い帽子の人人がスターを手に入れたような姿ですな。
おお！彼のせいで、木が次々と倒れていきます！

あります！

これはヤバイです！この国の自然除去違反法にひつかかります！

あらり、その姿をたまたま見た警察が動き出しました。

警察官走ります！走ります！

だが、差はどんどん離れていきます。

力チーン

警察官はプライドを傷つけられた！

じゃじゃじゃじゃーん

歩きながら使える黒電話をだした！

お、重そ…。

電話で助けを呼びました。

コンセントはないのですが、乾電池式なのでしょうか…。

おつと！3秒で500人の警察官が集まりました。

おいおい！早すぎというか、暇すぎだろー！

まあ平和なのは良いのですが…。

とはいって、この国では自動車はないので、（自転車も無い）

皆さん1輪車で追いかけております！

奇妙な光景であります。どこかのサークル軍団みたいです！

そんな事になつているとほんづかず、猛ダッシュの青年…

* *

そんなやり取りがしばらく続きましたと。

今の彼の状況は、仕事終わってスッキリ～ みたいな解放感に満ちています。

仕事は首にならずにすんだよつです。
ですが、彼の前には生存してこる警察官がずらつと居て、取調べを行っています。

こここの国は自然に關してうるさいですからね…。
処分はどうなることでしょう。

木を30本倒した罪、結構重いそうですよ。
只今、おっせんと一対一で話しを始めています。
しかも芝生の上にです。

はあー？ そんな取調べあ（強制終了）

「俺、郵便屋なんすよ」

言い訳をしてみる。

「そんな事は関係ないな
あつたり切られる。」

「・・・」

「俺、異国人なんすよ（たぶん）」

言い訳パート2

「・・・関係ないな」

「俺、この法律しらなかつたんすよ
これはマジ。」

「ほお。 そつか・・・まあ少しほは罪は軽くなるかもな
軽く流された。」

「そりいえば君の名前を聞いていなかつたな。何ていうんだね？」

「ああ。えつと俺、記憶喪失で名前覚えていないんすよ」

「はつはつは。そんな嘘はやめたまえ！」

「いや、まじなんすけど」

「嘘をつくと罪が重くなるぞ」

・・・ふーむ

「静雄つていいます」

「嘘だろ」

え・・・そんな

「しづお…静雄つて…」

「へ？」

「あの静雄か！？」

いんのかい！つていうか誰！

「スマセン…うそつす」

「ふ・・・そんな嘘をつかなくたつて。誰にも言わなから・さ

ー！」

え・・・キャラが変わっている、何がどうやら。

恐るべしどこかの静雄君。

・・・

ま、いつか静雄で。

世間話をしている。

以外に話し合つなこの人、と彼は思っていた。

長々しく無駄な話は続いていった。

「俺、知り合いに不思議な友達…・・・華人がいるんすけど、華人つてどういう種族・・・というか団体が知らない？」

おお！タメ口！

彼は軽く笑つていった。

もしかしたら華なら、花だけでなく、木も復活できるかもと思つた

から聞いたのだ。

「華人様はすごいぞ。枯れた花も木も人も蘇らせる事が可能なそうだ」

「へえ、すげえな！…………って人も！」

「ちょっと遅い。

「ああ・・・神に近い人達だな」

彼は心の中で思つた。

あいつ、花以外にも関係している仕事に就いてるのか・・・うええ！そこですか！？人を生きかえす事に驚きませんか！何か普通に受け流さないで下さい！

ああ・・・そつか。

誰かの助言により彼に疑問が浮かんだ。

「花以外も蘇らせる事ができるのに、何で華人っていうんすか？」

おいおいおい！そこじゃないって！

警察官は一瞬表情が固まつた。だが、ふつと笑つてこう言った。

「お前は知らないのか・・・華人様達には、表と裏があるんだよ」静雄マニアの言葉に、彼は背筋がぞつとした。

(表と裏?)

彼は華の人格が偽つているものとは思えなかつた。

疑いはしなかつた。

だが、華の触れたくない部分かもしれないと思い、話題を逸らした。

「華・・・華人に、助けにきてもらつてもいいっすかね？」

「それができたらベストだな」

以外に好感触!

「それじゃあ、華人様に宜しくな

んー。あいつ、30本も倒した木を復活できんのかな。

それに、なんか俺自己中だよな・・・

世話になつたらお礼、しないとな。

「頼んでみるっす」

「ああ。 よろしくな。 静雄！」

「うつす」

警察官は静雄に想いを託して、一輪車で本部に戻ってしまった。
いいのか！ そんなに仕事にアバウトで！

（　）（　）（　）

彼は正式に静雄になつた！

・・・マジっすか。

* * *

桜色の髪の少女と青い髪の少女が歩いている。

桜色の髪の少女… 華人はどこか悲しげな表情だつた。

「華人様、次はどちらに行きますか？」

青い髪の少女： 藍依は聞いた。

「んー。 そうですね。」

華人は目を瞑つた。手を空にかざした。

風を感じる、風の声で、華人の叫びを聞き分けた。

「ここから南東の方向が、自然があまりないようです。 そちらに向
かいましょう」

実はその場所、彼の性で自然がありません

！

華人がそう言つた後、でかい体格の男達が近づいて、周りを囲まれ
てしまつた。

じゅらじゅらしたアクセサリーをつけ、派手な服を身に纏つてゐる。

壊れたような表情。でかい態度。

「…何ですか？」

低い怒りを込めた声を、藍依が声を出した。

「そんな恐い顔すんなつて姉ちゃん」

けられらと馬鹿にしたように笑う。

「じ用件は何でしようか？」

先程より強い口調で言つた。

冷ややかで、怯えていない瞳。頑なな意志があるように見えた。

「俺たちやあ、天使様に用があるんだよ」

「お断りです」

きつぱりと言い返す。

少女に反抗されて、むつとした顔になった。

「ちょっと痛い目に合いたいのかな？え？」

ぎろりと睨みつけてくる。

震えあがりそうな深い瞳だ。こんな目をみたら、普通は体が固まってしまうだろう。

「痛い目には合いたくありませんが、絡まれるのも嫌です」

「こんのやろ！生意気なんだよ！」

そう言って、拳で藍依の頬を思い切り殴つた。バンッ！

高らかに音が響き渡つた。

藍依はその場から動かずに、手で頬を触つた。

「・・・なんだ・・・血も出でない」

そう言って勇ましい瞳で奴らを睨みつけ、にっこり笑つた。

意外な反応に男達は、怒りを感じる前に呆然とした。

「・・・」

そんな姿を冷静に見ていた華は、歩き出し藍依の前に立つた。

「藍ちゃん・・・」めんね

そう言って、華は紅い目で男達を見据えた。

力を解放するように、華々しい光が放出されていた。

天使の羽音よ……今ここに

「駄目です！」

藍依は詠唱を止めようとした。

フウツ

少女の凛とした声は遮られた。

『何してんだよ』

がしつと華の肩を掴む。

「え？」

2人の少女を厳つい男達が囮んでいたはずだ。
そこを堂々と輪の中に入っている・・・人間。

惹き付けられる黒い瞳、さらさらの黒い髪、高い身長。

「藍依・・・大丈夫か」

そう言って、藍依の頬を触る。

内出血していて、膨れている。

その姿を見て、彼の目の色が、変わった。

「・・・とりあえず蹴散らすか」

10・別れ・再開（後書き）

読んで下さりありがとうございました！
更新遅れてしまつてすみませんでした。
次回も宜しければ見てください。＾＾

11・蘇る記憶（前書き）

今回はシリアルアスです。
少しダークかもしれません。

「んだとてめえ・・・！」

男達は次々に彼に向かつて拳を向けた。

「よつと」

軽くかわして、相手の力を上手く利用し地面に転ばせた。
そうしている内に後ろから、2・3人武器を持って襲い掛かつてき
た。

素早く振り向き、武器の持ち手を、まず手で弾く。そして、相手の
足を上手くかけて転ばす。

隣にいる奴に足で、持っている武器を蹴つて吹つ飛ばす。
「武器飛んだからさ！藍依よろしく！」

「は、はい」

そつとひいて、見事に3つの武器をキャッチ。

「おーナイス」

彼は藍依を見て、親指を立てた。

そんな暇、今ありますか・・・。

「後ろです！」

華が叫んだ。

「？」

ザクツ

彼の腹部に刃物が刺さつていい。
鈍い痛みが走る。

血が彼の服に滲む。そしてぽたぽたと落ちる。

ガツツ！

「・・・ぞまあみろ」

彼の首は男の足に踏みつけられていた。

彼は喉に強い圧力を感じた。

「・・・いつてえんだけど」

喉を足で押されているため声が出にくい。

そして発音になつてない声で咳く。

きりきりと痛みが走る。

「悪い・・・」

「は！せいぜい仲間に別れを告げひやー」

「セーフ抑制できなくて」

「・・・は？」

ガンツ！！

「うつ！」

「どけ・・・」

低い感情を抑えた声で咳く。

彼は手で男の足首を掴んだ。握力はどんどん強くなる。

「・・・つ」

男の顔はどんどん引きつつしていく。

「やめろおー！」

「骨・・・折れるかもな」

にやつと冷めた表情で笑う。

彼は気が狂つたように、相手に力をぶつけた。

何かを守るために、何かを失わないために。

もつ手遅れにならない為に・・・。

少し時間が経ち現在、大勢の男達が横たわっている。

男達はぐつたりと荒い呼吸をしていた。

彼の姿を見たら一目瞭然だらう。

まず目つきが違う今までに無い、力強い瞳。

黒い瞳は濃さをましていく。

次第に髪の色が薄くなっていく。

黒から灰色・・・白・・・

グラデーションの様に色が移り変わる。

今には綺麗な金髪となっている。

「・・・こんなもんか」

ぱつぱと手を払う。

心配そうに藍依が見つめている。

何かが変わってしまった、それとも記憶を取り戻したのだろうか。

彼を見て、藍依は考えていた。

藍依は恐怖より驚きの方が強く感じた。

この人はさっきまでのあの人ではなくなっている・・・。

どうして・・・。

不安と疑問が藍依の頭から離れなかつた。

彼が後ろを振り向くと、丁度華人と目が合つ。

華人は目が合つと、ぱつと視線を背けた。

そんな華人を不思議に思いながら彼は華人を見つめた。

「久しぶり・・・だな」

華人に一步一歩近づく。

「・・・君」

「あ?」

「私は知らない」

華人は俯いた。手を強く握る。

「知らない・・・から!」

そう言つと、華人は走り去つてしまつた。

彼女の目には涙が溢れていた。

「なん・・・だよ。あいつ」

彼はそう言ひと、田を瞑りしゃがみこんだ。
うつ・・・

ズキンと傷口が痛む。そして酷く重い頭痛がした。
彼は額に手を押さえる。

時間が経つにつれ、髪はどんどん黒くなつていく。
彼から放つ、凄まじい殺氣は薄れていった。

はつと意識が戻る。

「・・・俺、何したんだ」

彼は、飛び散つてゐる紅い液体を呆然と見渡した。

* * *

置いてきたの。

忘れるつもりだったの。

心を痛める思い出なら、消してしまおうと。

1人だけ抱え込む事は辛いけど。

君が笑つていたから。
だから

又、新しい気持ちで接しようつて思つたのに。

でも覚えていたんだ…。君は。

記憶の片隅で。

それに、さつきみたいになつてしまつたら。
思い出してしまつたら君は、どうなつてしまつだらう。

前…見たいに…？

…ひひこ

…できない。

今更、前と回じゆるになんてできなによ。

戻せないよね。

許されないよね。

私に見せないで。昔のあなたの姿を。
思い出してもうから。

心、許してしまひかひ。

11・蘇る記憶（後書き）

お読み下さりて、ありがとうございます！
今回の見所はもちろん、彼が変身しました！（笑）
どうしたんでしょうか。

彼の記憶が戻っているようですが・・・。
いつか思い出す日が来るのでしょうか。
次回も宜しければ見てください。＾＾

「・・・」

彼は地面にしゃがみこんでいた。

彼の視界に映るのは、倒れている男達と紅い血。自分の手を見ると、紅く染まっていた。

藍依は彼の後ろに立つて、彼の姿を心配そうに見ていた。

「藍依・・・俺、何してた?」

その声に反応して、藍依が言葉を発した。

「私と華人様を守つて下さいました」

そう言いながら、藍依は彼に近づいた。

「傷、深いと思います・・・病院にいきましょう」

しばらく沈黙した後に、彼は微かに頷いた。

「華…は?」

「華人様も心配です。ですが、その前にご自分の体を・・・」

彼の腹部から紅い血が流れ出している。

血と痛みが彼を刺激する。覚醒していく。

目の瞳がだんだん濃くなっていく。

「いやあ・・・！やめてえ・・・っ！」

紅い血、横たわる少女

何もできずに、されるがまま

届かなかつた想い、冷たい体。

何もかもが遅かつた、時を戻すことはできない。

「俺は平氣だ」

鋭い瞳で藍依を見つめる。

「あいつを・・・守らなきゃいけないんだ」

彼は走り出した。痛みなんて、傷なんて無いかのよう。

* * *

一面の水。潮の音。

海辺に華人は居た。儘げに海を眺めていた。

辺りは日が落ちて、橙色に染まっている。綺麗な海辺に、風が優しく吹き渡る。

「見つけた」

華は、はっと息を呑む。

振り返ると、夕日に照らされる彼が居た。金髪が風に靡いている。

「・・・ 来ないで」

「いやだ」

華人に近づき、ぐっと腕を掴む。

「何でだよ」

強い瞳で彼女を見つめる。華人は顔を背ける。

「もう、遅いんだよ」

消えそうな声で呟く。

「何が」

「駄目なんだよ・・・」

ぽろぽろと涙が落ちる。

「・・・ そんな事言われても分かんねえんだよ」

彼はふうとため息をつく。

「お前の悪い癖だぜ? はっきり言えっての」

そう言って指で華人の涙を拭つた。

その行動に驚いて、華が彼に目を向ける。

紅い瞳が涙で潤んでいる。

「泣き虫なとこ、変わつてねえな。お前

優しい瞳。穏やかな表情。昔の記憶と重なる。

優しくて強い君。弱い私を君だけは、守ってくれていた・・・

「馬鹿・・・」

「は?」

上田遣いで彼を睨みつける。

「・・・になんか、会いたかくなかったんだからあ・・・」

泣きながら華は喋り出した。

「ばかあ・・・ばかあ」

ぽかぽか彼を叩く。

「忘れないでよ・・・悲しかったんだからあ・・・」

ふつと彼は笑つた。

「...『じめんな』

ぽんと華の頭に手をのつけた。

* * *

神様・・・。

私、もうわがままいません。

許されなくともいい。

前みたいに戻れなくてもいい。

彼を苦しめる事になつても、彼を奪われたりなんかさせない。

彼を無くしてしまつたら、私はこの世界を全力で守ります。

私は天使の宿命は受け入れています。

だから、

その日が来るまで。彼と笑つて過ごしていたいです。
ずっと、ずっと。

12・光る海（後書き）

お読み下さりありがとうございました！

華が、彼に心を開いたようです。

心を開くのを早いですかね・・・。

そのくらいに昔に、彼と仲良かつたのだと思います。

この回から、華が前向きになってきたと思います。

華人の話す天使とは何なのでしょうか・・・？

次回も宜しければ見てください。^ ^

13・藍依の声（前書き）

今回、藍依の本性が現れます…。

13・驚きの声

夕暮れ、海の波立つ音。

青年と華人は海辺に座っていた。

座っているというよりも、華は青年の肩に寄りかかっていた。
華は眠たそうな表情、そして幸せな表情だった。

金髪の彼は、照れたそぶりはなく真っ直ぐ海を見ていた。
遠く遠くを見ていた。

久しぶりの本当の再開。

秘密や疑問を抱きながら、お互い何も聞かなかつた。
いつか嫌でも分かる日が来ると分かつっていたから。

* * *

しばらく時は経ち・・・

「華人様・・・」

走りながら藍依が近づいてきた。

「ここに居たんですね」

少し息を切らしながら、藍依は言つた。

そして華人に目を向けた。

「・・・」

藍依は目をぱちくりさせた。
肩を寄せ合つ2人・・・

藍依の思考回路 選択肢編

1・無難に、昔の友達

2・実は！生き別れの兄弟

3・もしかすると、友達以上恋人未満？

4・ありえないだろう、隠し子

5・禁断。そして絶対あつてはならない、恋人関係

「もしかすると、あの、お2人つて…？」

青ざめた顔で恐る恐る聞く。

「鯉人？」

字違うから。

つまり、『恋人』と平然に金髪の青年言いましたー！

「そんな事つて…」

愕然とする藍依。

落ち込む藍依に投げかける言葉。

「ん？もしかするとお前つてレズだつた？」

ブツチン！

藍依の堪忍袋が切れました！

藍依の性格が豹変するので『注意下さい。

「ふざけんなつてえーの！」

彼の胸倉を掴む！

「今頃しゃしゃりでて何言つとんじゃーー！」

ぶんぶん振り回す！

「しかも、何故金髪になんだーー！」

あまり関係ない。

そして彼を地面に叩き付けた！

叩きつけられた彼、実のとこあまり痛がっていない。

「・・・なんだよ」

「あほ、あほお」

ぼろぼろと泣きながら、その場に崩れる。

「お前が、華人様の言つていた人だつたなんて…」

呆然と藍依を見る。

確かに、前までは大人しいクールな子だつたような・・・

「藍依、性格変わつてるぞ」

藍依は涙を手で拭きながら答えた。

「だつて…好きな人の前では可愛くなりたいから

「へ？俺のこと」

「違うわい！華ちゃんのことだよ」

「華ちゃん？」

* * *

俺は華から話を聞いた。

どうやら2人は見た目以上に仲が良かつたらしい。

藍依は、華人に助けられてから一目ぼれしてしまつたらしく、

昔に想いを堪えきれず、告白したらしいが

華は「私、大好きな人がいるの」と言つて断つたらしい。

それは俺の事らしい。少し照れるけどな。

あともう一つ分かつたこと。

やっぱり、俺の記憶のあの少女は、華だつたって事。

疑問の1つがあの頃と年が変わっていないような・・・

まあ、あえて聞かなかつた訳だけど。

色々あつたからな。しょうがねえよな。

* *

今は夜。近くのホテルに泊まる事になった。

相変わらず藍依はいじけていてさ。ふう…めんどくせえ。

俺は「」機嫌をとひつと藍依の部屋の前に居るわけだけじゃ。

「おーい

とんとん・・・返答なし
ま、粘るわけだけどさ。

「藍依ちゃん

とんとん・・・

「キモイ

うつ・・・何気に傷つくか。

よし、强行突破。

「つーか入るぞ」

がちゃ

ばたばたばたつ！

おお。足速いな。

「何入つて来てんの！」

「しょうがねーじゃん。開けてくれねえんだもん」

「・・・

「話できればいいからさ、ソリヒテてもいいか？」

「…分かったよ。」

よし、じゃあ本題にはいるか。

「でわあ…

ひと

「ん？」

藍依が俺の手を握っている。

「寒い…よね。中、入つて

「あ、ああ」

やつぱり優しい奴なんだよな。藍依って。

よいしょっと

俺は椅子に腰掛けた。

「話つて？」

「まあ話つていうか。礼が言いたくてさ」

「礼…？」

「俺が死にそうな時、助けてくれただろ？」「う、うん」

「ん？何でそんなに歯切れが悪いんだ？」

「でも、あれは華人様が助けたようなもの。私は何もできなかつた」

「華？」

「その事は、私もよく知らないけど」

「華人様は天使を宿しているみたい
天使？」

「人工天使つて知つてる？」

「…・知らない」

「人工天使というのは、たくさん人の魂と聖靈を紡ぎ合わせて
人工的に作ったものの事を言うの。

昔、天使虐殺と言う事件が起きて、たくさんの人命を失った。
何者かが天使を作る為だけに企画された儀式…」

藍依は色々その天使について説明してくれた。
話している時、藍依は悲しそうな顔をした。

言葉から憎しみも感じられた。

「それはともかく、華人様は天使の宿り主として選ばれた…と思つ
天使は何者も癒し、気高い力を持つと言われているから」

「あなたを助けたのはその天使だと思う」

「それって華は大丈夫なのか？」

「分からない… 最近に起きた出来事だから本にも載つていなかつた」

「華に聞いてみる必要があるな」

「あいつが本当の事を言つとは限んねえけど…・・・

「ありがとな… ってかさ藍依に渡したい物があるんだ」

「?」

ふつふつふ。これは藍依も喜ぶだらう。

じゃじゃじゃじゃーん

「人形ですか？」

あ、敬語になつてゐる。

「小つちやいけどお守り、藍依には青い兎人形！」

「か、可愛い」

お、よかつたよかつた。

「ほい」

「ありがと…です」

ご機嫌取り成功か？

「んじや。頂戴ちようたい」

「お金ですか？」

「おいおい、あげたもんに金取るつて俺何者だよ」

「あ、そうですか。では何を？」

俺は自分を指で指した。

その瞬間、藍依は顔が真っ赤になつた：何故に？

「名前ですか？」

「ん。そうそう」

「覚えていたんですか」

「藍依こそよく覚えてたよな

「ずつと考えていたんですよ！なのに急に郵便屋さんに戻つちゃつたし…」

「わらいわらい」

「郵便屋やめて、これからはお前ひどいところがり…あらべれ事もあるしむ」

「…はい。分かった」

「ん? 言葉変だぞ。」

「それでは、名前言いますー。」

「あ、ああ」

「……」

「梓月^{シズキ}です！」

練りに練つたこの名前! あなたが静雄に拘つていたので、
そこも配慮しました!」

ああ…そんな配慮を、わざわざどうも。

「梓月^{シズキ}…か。何か良いじやん。(静雄^{シズオ}より) ありがとな

「はい。どういたしまして」

そう言つて藍依はにこつと笑つた。

以外に子供っぽい藍依とも仲良くやつていけそつだ。

これからも、ここからと一緒にいるつもりだ。
華を守るつていう事もあるし、(つていつか、なんで華狙われてい
るんだ?)

俺のやるべきこともあるし。

これからも色々ありますんだな。

13・驚きの声（後書き）

読んで下さりてありがとうございます！

今回のタイトルの「驚きの声」は
藍依の性格変わった事をいいます。

そして、ついに名前が決まりました！

ちなみにですが、彼の髪はこれから金髪です。
(前は黒髪でした)

金髪と名前がこれから話のキーワードになります。

主人公は梓月という名前です。

次回も宜しければ見てください。^ ^

14・異なるキミ

夜が深け朝になつた。

その日は曇り空で、風が重く少し肌寒い日だった。

昨夜、3人は別々の部屋で時を過ごした。

隣り合わせた3つの部屋の1つから唸り声が聞こえた。

その声はもがく様な声で、叫び声にも聞こえた。

彼：梓月はふらふらと重い足取りで、部屋を出た。勢いよく扉が閉まる。

梓月は首を抑えて咽ると、ゆっくりと扉に寄り掛かった。

吐く息は白く、顔は赤い。苦しそうな表情を浮かべている。

「……華」

少しずつ寄りかかっていた体が落ちて、床に体を落とした。

* * *

大きい紅い瞳が彼を見つめる。

「大丈夫ですか？」

心配そうな表情、よく見ると瞳が潤んでいる。

彼はベッドに横たわった重たい体を起こして、深いため息をつくと顔を俯かせた。

「華…俺どうなってる?」

「ふえ?」

華はいきなりの質問に首を傾げた。

そして、まじまじと梓月を見つめる。

「いつも通りですよ」

「…そつか、「

ほっと安心したような表情になる。

その姿を見て不思議に思った華は彼に近づいた。

華の白い手が、彼の額に触れる。

「熱…あります」

「ん、でも大丈夫」

梓月はにっこりと笑う。

「…隠しています」

「へ？」

「私にはもう、あなたの心は読めません…」

華の目の色が変わり、虚ろな瞳になる。

「あなたが完全に変わってしまったから」

悲しげな瞳で華が言った。

「……？」

意味深な発言に梓月は目を細めた。

「俺が変わったって…記憶を取り戻しただけだろ？」

華は無言で首を横に振った。

「正直に…言います。あなたは今までのあなたと違つ…」

梓月は軽く笑つて言った。

「何言つてんだよ。俺は俺だって」

華は静かに息を吐いた。

「闇夜に生きる精霊…

『死月』『デス＝ムーン…』ですよね」

梓月は目を大きく開いた。驚きを隠せずしばらく硬直したようだった。

そして口元がにやりと緩む。

「なんだ…もう分かつたのか」

クスクスと笑つて華を見つめた。

「さすが華人の姫…いや、天使様」

冷たく鋭い目が、華を睨む。

「…彼を、返してください」

華は怖気ずにひたむきな瞳で見つめ返した。

そんな華を見て、彼はつまらなそうにゆづくじとベッドから降りる

と、立ち上がり喋りだした。

「こいつ自身が俺を受け入れたんだ、あいつはもういない」
ふん、と言うような態度、彼の手が華の首に触れた。

「お前を守れる力が欲しかったためにも、こいつは自分を売ったんだよ。
知つてたか天使様？」

「…！」

「可愛いお嬢様。守つてやるから安心しろって」
そう言つて華の手をとつて手の甲に口をつけた。

「や…めて」

ぱっと手ではじく。

「本当なの？」

「天使様なら見えてたんじゃないか？こいつの未来ぐらいさ」
「暗い空…満月しか見えなくて、何を意味しているのか分からなか
つた。

黒い月は夜の精霊を意味とする…それだけしか
華は体の震えが止まらなかつた。

時分の牲で大切な人を失うとは思つていなかつたから。
目の前にいるのは、彼とは似ても似つかない冷たい瞳の青年だつた。
彼の優しく笑つた姿と異なる、あざ笑うような表情。

「ま、それがこいつの人生だ。光を失い闇に染まる…お前を守るた
めにさ」

にっこり笑う。その言葉は華の心を深く刺した。

「私の…牲で」

震える体をおさえてきゅっと拳をこじめる。

しかし、涙は流さずに心が絶望に呑まれていった。

14・異なるキリ（後書き）

読んで下さりありがとうございました！
梓月が完全に乗り移られてしました。
彼はどうなつてしまつたのでしょうか。
代わりに死月が大暴れします！
次回も宜しければ見てください。　＾＾

15・惹かれていく心（前書き）

前回のあとがきに書いてしまったのですが、
彼は暴れません。すみません！

15・惹かれていく心

立ち尽くす少女がいた。

目が黒く澄んでいて、瞳に宿る光、…生気が全く無く、遠い所を見ているようだった。

可能性を信じる事よりも、絶望に酔いしれていた。

そんな華を見て、少し罪悪感を感じながら耳元で囁いた。

「ま、俺はお前の敵じゃねえから仲良くしようぜ？」

声が届かなかつたように、何も反応が無かつた。壊れてしまつた人形のようだ。

ただ遠くを見つめていた。

「・・・」

その時扉が開いた。

「あれ？おはようございます…華人様。それと梓月！おはよー！」

梓月の泊まつた部屋に、華が居るのに戸惑いながら、にっこりと藍依が部屋に入つてきた。

こういう時もちゃんと先に華に挨拶をするのだ。

華人を見て何かおかしさを感じたのか、不満な顔を表す。

「ちょっと梓月！何華人様を悲しませているの！何かしたんじゃないでしょーね！？」

怒るように言葉をかける。でもその言葉は本気では無かつた。

今まで見てきた彼はそんな事をするとは思つていなかつたから。

「よう、藍依。いやちょっとさ取り込んでてさ」

そう言って困ったように頭を搔きながら、屈託の無い笑顔を見せる。その姿に安心して、からかつたように喋りだす。

「華人様に失礼ない様にね！それでは、先に1Fのレストランに行つてます。華人様」

前の藍依とは思えない、元気な素振りを見せた。

華の前ではねこかぶつていた、という事もあるかもしけないが梓月

に心を開いてきた、といつ理由もあるのだろう。

「ああ、分かつてゐるつて。後で行くよ」

そう言って、手を挙げた。にっこり笑つて藍依は扉を閉めた。

* * *

「上手いだろ、華？」

華の顔を覗き込んで、にやりと笑いながら話しかけた。

そんな彼をお構いなしに、時が止まつたように立ち尽くしていく。

「…反応なしだよ」

つまらなそうになると寂しげな表情を一瞬浮かべた。

そして何か浮かんだように、にっこり笑つた。

「華！」

彼みたいな優しい声で、名前を呼ぶ。

その声を聞くと、心にぼつと火が灯るようだつた。

はつと意識が戻つたように目を開く、いつものような綺麗な瞳に戻る。

「…えへへ」

微かに笑う、本当の彼ではないと分かつていながらもその声を聞くと安心してしまつ。

笑顔が勝手にこぼれてしまふ彼の優しい表情。

華の笑顔は天使の笑顔みたいに可愛らしかつた。

笑顔を返された死月は、嬉しさと恥ずかしさが混ざつた複雑な気持ちになつた。

そんな華を見れるなら、あいつのフリをしてみてもいいかも知れないと死月は思つた。

「…なんて、キミじゃないのに…ごめんなさい」

華は切なさそうに笑う。彼の代わりにして申し訳ないといつ気持ちが表れた。

「精靈さん。自分の事は自分で守れます。それに藍ちゃんもいるか

「ら…

あなたはあなたの世界へ…戻りたくないのですか？」

死月はふっと笑って答えた。

「精靈界はもう飽きた。俺は、お前との世界で時を過ぎる。天使の力で永遠に生きることだつてお前にできるだろ？ 後もう一つ、この世界を無にする。人なんてこの世界のゴミだ。排除するべきだ。

人間にあんな事されたお前が一番分かっているだろ？」

ざつと悲しみの過去が華の頭を過ぎた。

いやあ・・・！やめてえ・・・っ！

紅い血、されるがままの記憶。

それを思い出すだけで心が締め付けられる。

でもその苦しさを前向きに考える。

「…彼らを消すっていう選択は選びたくないんだ。それは…逃げた事になると思うから」

苦しそうな声で呟く。

そんな華を尊敬するかのように見つめた。

「ふーん…つまんねえな」

「でも、私を守る為に彼を失う事。私、納得できないから…だから」

その言葉を遮るように彼は話した。

「…いいよ、分かつてる。お前の敵を全部排除したらあいつに返すよ」

ぽんと手を華の頭にのっける。

そして彼みたに、優しく微笑む。

彼の意外な優しい態度に華は心を動かされた。

「腹減ったし、食いに行こーゼ」

明るい声で華に話しかける彼。

部屋から出て彼の後ろに、華はてくていて歩いて行く。

彼の背中を見つめて華は思つた。

私は、どのキミが大切なんだろう・・・。

誰をずっと想っていたんだろう。

おかしいね・・・。

もう、分からなくなっている。

15・惹かれていく心（後書き）

お読み下さりありがとうございます！

彼が暴れる予定が、優しくなっています・・・。
心が揺れる華です。

昔からの知り合いの彼、精霊の彼、華はどうぞを
大切に想うのでしょうか。

華に待ち受けた天使の宿命とは何なのでしょう?
次回も宜しければ、見てください。^ ^

賑やかな笑い声が聞こえる、明るい雰囲気のレストラン。そこでは美味しい料理を楽しむ事ができた。

朝から豪勢な料理が並んでおり、バイキング形式となつていて、綺麗な景色が見渡せる窓側のテーブルで、3人は食事をしていた。

「華人様。こここの料理はとても美味しいですねっ」

「はい。すごく美味しい…です」

ホットケーキを美味しそうにほうばりながら華人は答えた。ふわふわの触感のスポンジに甘い蜜とバターをつけて食べている。贅沢な味わいで、ほっぺが落ちそうである。

「・・・」

信じられないものを見るように藍依は彼…死月を見た。

「？…なんだよ」

「すつごい意外！梓月が甘党なんて！」

ああ、と思い出すように華も喋りだす。

「そういえば甘党でしたよね」

彼は口に運ぼうとしたフォークをお皿に置いた。

「…いいじゃねーか、別に」

顔を少し赤くして、ぶすっとしたような表情になる。

彼のお皿には、色とりどりのデザートが一面に置いてある。

「あははっ！お皿によそる時恥ずかしくなかつた？絶対周りの人、驚いていたよー」

とても可笑しそうに藍依が笑う。

「…俺はお前の性格の変わりよつに驚いたけどな

「なにおーーあんただつて金髪になつてから口悪くなつてんじやん

！」

「俺は理由があつて性格が元に戻つただけだし」

「するい！記憶喪失の牲にするなんて」

「…俺だつてなりたくてなつた訳じゃねえし

険悪な雰囲気が漂う。

あわわ。2人の関係が危ない・・・?

そんな2人の会話を聞いて、話題を変えようとした華。

「そ、そういうえば、なぜ藍ちゃんはシズキと呼んでいるのですか」
いつのまにかにシズキという名が定着している事に疑問を抱いた。
華は藍依にも彼が精霊に乗り移られている事を、知っていると思つたからである。

「ああ。そっちの死月じゃなくて、こいつが俺に仮の名をつけてくれたんだ」

死月^{シズキ} 梓月^{シズキ} 発音が同じな訳です。

ずっと甘いミルクティーを飲んで死月が答えた。本当に彼は甘党です。

「なんでシズキという名前なんですか？」

「あのですね 何かあるたびに彼が静雄にこだわるので、そんなに静雄が好きなら似たような名前にしてあげよつーと思いまして、シズキという名前にしました」

「… そういえば静雄さんってよく耳にするお名前ですよね」

「そうですね 誰なの？ 梓月」

ぱりぱりとチヨンクッキーを食べながら答える。

「? よく分かんね」

「・・・」

本人すらよく知らない名前…。

食事を終え、ホテルから出る時に藍依が華に話しかけた。

「あの、華人様。次はどちらに向かうのでしょうか?」

「んー。そうですね……あ、そういうば前行こうとしてた場所がありましたよね」

藍依は首を傾げて思いだそうとする。

「あー不良にからまれて行けなかつた場所ですね」

彼がぶつとばした牲で樹が破壊された、あの場所です。

「音^{ネウ}憂はすげーな、樹とか復活できてさ」

彼が口にした何気ない言葉。

「梓月…ネウって誰?」

・・・

音憂…音憂!

華は遠い昔を思い出した。

少女は振り返る。

僕、音憂を守りたいから、僕は護衛士になるって決めた…決めました。

なにやら、馴れない言葉で話す少年。

少女は少年の言葉に目をまるくする。

びっくりしたよ。…急に言葉遣いが変わつて。

照れくさそうに少年は喋りだす。

だって護衛士は主人に敬語で話すだろ?それに、ただでさえ音憂は誇り高い華人になるんだから敬語の方がいいと思つて。

少年の言葉に少女はくすっと笑う。

あははっ。言葉遣いもどつてるよ。

少女の言葉にカチンときたかのよつこきつい口調になつた。

…これから勉強すんだよ!

その表情を見れて少女はほつとしたようだった。

そつちの方がキミらしいよ。

にこつと笑つて少女は言った。

「音憂…は私が人として生きていた頃の名前…です」

華は藍依に向かつて答えた。

華には疑問が浮かんだ。

なぜ精霊さんが私の本当の名を知っているの・・・？

16・眞実の名（後書き）

お読み下さりてありがとうございます！

華の過去を知つている死月。

いつから梓月に乗り移つていたのでしょうか。

それとも他の理由が…？

次回も宜しければ見てください。　＾＾

17・桜の墮天使

音憂……は私が人として生きていた頃の名前……です

華の透き通った声が辺りに響く。

ざわつと風が吹いて、周りの森が揺れた。

戸惑いながら華を藍依は見詰めた。

「人だつた頃……とはどういうことですか？」

藍依は不安を感じながら言葉にした。

華人様が人間ではない……？

大きな紅い瞳、綺麗な桜色の肩までの長さの髪。

幼い顔立ち、低い身長。

華は見かけから、何もかも人間そのものだった。

華の言葉に反応するように、黒眼だった死月の瞳が段々と蒼くなつた。

夜の闇のような深い蒼だった。

「音憂……お前」

ありえないものを見るように死月は、華を見つめた。
ざつと鮮明に記憶が蘇つてくる。記憶は全て戻したはずなのに。
震える拳を握り声に出した。

「死んで……たのか」

辺りが凍りついたように、固まりついた。

華は顔を俯いて頷いた。

「…………うん、そうだよ。思い出した？」

そう言って、にっこり笑う。

「あなたが私を思い出したという事は、やっぱりあなたが本当のキミなんだ」

見た事もない冷たい瞳で、死月の顔を覗くように見つめる。

「黒髪だった頃のきみは偽り…なんだよ」

可愛くもあるが恐ろしい表情で華は言った。

「記憶障害・短命症……覚えている?一緒に病院に行つた時、キミが宣告された病気、いや呪いなんだけね」

紅い瞳を大きく開いて、静かに言葉に出した。

「私が呪いを、かけたの」

くすくすと笑い出す。見た事のない表情で。悪魔のような笑顔で。

突風が吹き荒れる。

一瞬の内に桜が舞い、辺りは白く光りだした。眩い光の牲で藍依は咄嗟に目を瞑つた。

・・・

風が止まり、光が弱まつた様子だったので、藍依は瞑つた瞳を開いた。

そこには、氣高く桜風に吹かれる女性がいた。髪は腰までのストレートで、桜色の髪。

背中から生える、白い翼。

それは天使そのものだった。

天使は死月を見つめて話しだした。

「死月…きみは言った。私を守る為に彼はいなくなつた」と

死月は疑るような瞳で天使を睨む。

「ああ…だから?」

天使は口元だけにつっこりとする。

「黒髪のキミも今のキミも同一人物…だよ」

一瞬の内に血の気が失せ、彼は呆然した。

「違う！あいつが俺に頼んだんだ！華を守ってくれって！」

俺は違う！あいつとは違う！あいつは人間、俺は精霊 デス＝ムー
ンだ！」

壊れたように、死月は叫んだ。

息は荒く、肩で呼吸している。彼は心が乱されていた。

そんな死月を馬鹿にするように笑う。

「じゃあ、証拠は？あなたと黒髪の青年との違い」

彼は言葉が出なかつた。記憶を思い出す内に、勝手に自分が一人芝居をしていた気分になつていく。

「……」

「あなたの髪が黒髪だったのは、私があなたの精霊力を奪つたから今は精霊力が開花されているから金髪なの」

「……」

「なぜ、あなたの精霊力を奪つたかと言うと、精霊の力はこの星を一瞬で壊すほどの力を持っているから！」

そして私、華人は2つの顔を持っているの。

前にも言つたように、華…つまり花、樹、草。自然を守る団体として活動としている顔。

もう一つの顔は、この星を精霊から守る…精霊を駆除する団体なの！キミみたいに幼き頃に悪霊に取り付かれて、完全に悪霊に寄生された者の事を精霊と言うの

精霊となつた者でも、呪いをかければ大体記憶を忘れて人間として生きていけるんだけど

きみは駄目だつたみたい！危ないから早めに駆除しないとね

もう呪い、つまり精霊力を奪う事はできないから覚悟して下さいね！」

天使は説明を終えると、ひらひらと舞つ桜を手で握つた。

そして手を開いて息を吹きかけると、光り輝く日本刀のようなものになつた。

鋭く綺麗な桜色の剣。

それを片手で握り締めると、にっこり笑った。

「記憶を思い出さなければ……生きていられたのにね」

天使は剣を持って走り出した。

17・桜の墮天使（後書き）

お読み下さりありがとうございました！

なんと華が天使になりました。

天使というよりも悪魔みたいで（笑）

華はどういう過程で天使となつたのでしょうか？

華の過去は次回書く予定です。

次回も宜しければ見てください。＾＾

先程までは楽しく食事をしていたレストラン。そんな時を過ぎたホテルの前で、静かに戦いは始まっていた。

天使は走り出す。片手に剣を持つて。

微かに浮かびながら、風を切る速さで死月に近づいた。華が舞い、風が揺れる。

一瞬の内に、死月の目の前に足をつけた。

「ぼーっとしないで」

天使は低い綺麗な声でそう言つと、剣を死月の顔に切り付けた。どんっ

「・・・！」

死月は押されて、頬に軽い切り傷を負うだけですんだ。

その代わりにバランスを崩して吹っ飛んだ。コンクリートにぎりぎりと滑る。

コンクリートの摩擦の牲で、死月の穿いていた黒いジーパンが所々破れていた。

「華人様・・・！やめて下さい！」

今にも消えそうな、かすれた声で藍依は叫んだ。

藍依が死月を押した後に、天使の前に立ちはだかるようにして藍依は立つっていた。

死月を庇うその行動に驚きながらも、冷たい瞳で言い放つた。

「藍依ちゃん？・・・あなたに関係ないの」

天使はふつと笑つて微笑んだ。

憎しみの込めた不恰好の笑顔。綺麗に笑う華とは似つかない笑顔だった。

その笑顔を見て藍依が眉をひそめる。

「…あなたは本当に華人様ですか？」

藍依を愚かに見下しながら答える。

「そう、あなたとずっと旅をしていたのは私よ、一人ぼっちのあなたを救つたのも私。

あなたに利用価値があつたから今まで一緒にいたのよ。もう必要ないけど」

「・・・！」

藍依も目元が下がり涙が滲んでいく、悔しさで胸が張り裂けそうになる。

「あなたなんかじゃない！華人様は、そんなお人ではない！違うんじょ・・・あなたはただの人工天使じょ・・・」

目に涙を溜めて話しかける。

そんな藍依を見つめて、ふうとため息をついた。

「お馬鹿な藍依ちゃんに教えてあげる。私は犠牲になつた複数の少女の魂と聖靈が融合した姿。まあ、あなたの言つとおり人工天使と呼ばれている。

前の姿は、音憂つて子の意識が強いみたいだから、音憂つて子の姿で生きていたわ。

でも何も変わりはしない・・・あなたが慕つていたのはこの私だもの」

苦笑を浮かべながら話す天使に、藍依は絶望した。

自分の憧れていた人がこの人だつたなんて・・・

藍依は零れた涙を手で拭つた。そして目を瞑つて息を整える。澄んだ瞳できつと睨みつける。

「分かつた」

「そう、じゃ離れていて。精靈にこの星を滅ぼされるのなんて、あなたも嫌でしょ？」

死月は立ち上がりつて藍依に話しかけた。

「ああ。藍依・・・離れてる」

藍依の後ろから聞こえてくる声。

死月・・・

「さあ、どきなさい」

華人様・・・

正義ぶつている悪魔のよつた華の天使・一瞬で世界を滅ぼす事がで
きる月の精靈

天使と精靈あなたはどちらを選びますか?

18・選ぶべき道（後書き）

お読み下さりてありがとうございます！

さあ、藍依はどちらの味方になるでしょう？
すみません！華…といふか天使？の過去は
もうちよつと先になります！

すみません。こんな作者で・・・。
次回も宜しければ見て下さい。

19・消えゆく少女

前には天使、後ろは精霊に挟まれて藍依は選択を迫られていた。
裏切られた心はひどく傷ついていた。

あなたを利用するためよ・・・

その言葉を思い返すたびに、体が震え、心が痛む。
でもその心を閉ざすように、目を瞑る。

裏切られた・・・なんて言っちゃ駄目だよね、だって、それは信じた私の責任だから。

うん・・・平気！

藍依は前を見据えた。

どっちの味方になるかなんて、そんな事決まっているじゃない。

藍依は前に向かって歩き出す。

ずっと尊敬していて憧れを持っていたあの人の所へ。

「...天使様ではなく、音臺様の為に協力させてもらいます」

藍依は、華人を見る時と同じように尊敬した眼差しで天使を見つめた。

そんな藍依を天使は馬鹿みたいにみつめた。

「邪魔なんだけど、まあ好きにしたら」

「...ありがとうございます」

藍依は低い声で答えると、腰に巻いていた鞄から切れ味のよい長い、
シンプルな

剣を取り出した。

見なくとも感じる、この感じ・・・。

藍依は剣を構えると、きっと前を見つめる。

遠くから見ても存在感が薄れない、死神のような存在。

今までの梓月とは全く違う人物になっていた。

死月の出す禍々しい氣に、藍依は背筋がぞつとした。

「あんなもんじゃないわよ、精霊デス＝ムーンの力は」

天使は全く怖氣づいてない表情、声で藍依に話しかけた。

「はい…分かりました」

そう答える内に、一瞬で天使は飛び立つような速さで精靈に向かった。

そして桜色の剣を死月に向かつて振りかざす。
首元を狙つたその剣は勢いを増す。

ぱしつ

「あめえ！」

「甘んだよ」

死月は軽々とその剣を素手で掴んだ。

その瞬間に、天使は華やかな閃光をだして死月に打ち付けた。
燃えるような音が響き渡る。死月の腕に当たつたようで、火傷のような跡が付いていた。

死月は腕をぱっぱと手で払うと天使を睨み付けた。

「なんだ？ そのインチキ魔法」

「インチキ魔法なんて呼ばないで、あなた撃退用に開発した聖光魔法よ」

「ふうん。普通の魔法なら俺にかすり傷一つ付けられないはずだしながら」

そう言つて桜色の剣を手で握り締めて割つた。

「これで剣は意味ねえって分かつたな」

にやつと笑うと、今度は死月の手のひらから蒼い光の玉が現れて剣の形に変化していった。

蒼く細長い剣、氷のように冷たく鋭い剣だった。

「かすると凍傷すっから」

そう平然と言つて、天使に向かつて剣を向け、左肩から斜めに剣を振りかざした。

スカツ

「あ？」

切り付けた感触がない。手に残るのは空氣を切つた感触だけだった。

剣は確かに当たった筈だった。

天使はくすくすと笑い出す。

「言つたはずでしょ？私は人工天使つて。聖靈と人の魂を融合したものだつて。

私がかりに傷一つ、あなたは付けられないのよ」

細い瞳で死月を睨む。

「・・・ふざけんなよ」

「冗談なんか言つて意味があるとは思えないでしょ」

そう言つて、手のひらから再び華やかな閃光を生み出した。

「特大のお見舞いするね」

天使はにこっと笑う。

詠唱をやめさせる事はできない・・・となれば魔法防御をするしかない。

蒼暗い闇のような霧が死月を包む。

「これで、あれ防げつかな・・・」

自信の無い声で呟く。

聖光魔法は死月の大の苦手とする魔法だつた。

薄暗い霧を纏つている牲で微かにしか見えないが、天使は半径10mはある巨大な

閃光の光を抱えていた。

「生きるか死ぬか半々だな」

そう言つて体に懇親の力を入れた。

ゆつくりと巨大な光が近づいて来る。

「さよなら、死月」

につこと笑つて死月に向かつて手を振る。

寸前の所まで光と霧が近づいた。

ドシャアアン

激しい音が周囲に高らかに響いた。

しかし痛みは全く感じない、目を開き前を見る。

「・・・」

目の前には信じられない光景があった。

蒼い綺麗な長い髪。

ぼろぼろになつた少女がそこに倒れていた。

「藍依！」

19・消えゆく少女（後書き）

お読み下さりてありがとうございます！

天使さん。攻撃を受けないなんて… するい！（笑）

藍依は大丈夫でしょうか？

微妙な心境で迷う彼女です。

次回も宜しければ見て下さい！^ ^

20・お別れの日

輝く光は自分に目掛けて飛んできたはずだった。
多少の怪我ではすまない傷を負つはずだつた。
しかし何とも痛みを感じない。

前を見ると自分の代わりにその痛みを受けた少女の姿が居た。

「藍依！」

死月は走り出した。藍依に近づいて体を揺する。

ぼろぼろになつた服、頬には火傷の跡がいたるところにある。
藍依の白い肌からは、鮮明な血があふれ出している。

「お、お前！何してんだよ」

突然の出来事に死月が焦る。何故だか無性に胸がむかむかする。

俺なんて必要されない存在なのに。何で俺なんかを庇うんだよ

…。

「梓月、梓月…」

微かに動く唇。かすれても綺麗な声が死月に聞こえた。

「…あんま喋んなよ」

そう言つと、藍依はにこつと笑つたが、首を横に振つた。

「死月…は精霊だけど。そんな事、関係ない…よ。梓月は私の大事
な…友達だよ」

ぼろぼろになつても懸命に喋る姿、その言葉、その存在に梓月は救
われた。

「…喋んなつて、馬鹿」

消えそうな声で藍依に話しかけると、藍依の綺麗な髪を手で触つた。
さらさらで梳かしても絡まる事の事ない綺麗な蒼い髪。

すると、髪を触る梓月の手を藍依は掴み、自分の頬に寄せた。
そうすると安心するかのように藍依は微笑んだ。

「私、思うの。天使様はあなたを殺せないって、きっと演技よ。音

憂様の…」

藍依が喋り終わる前に、藍依は悲鳴をあげた。

藍依の体が痙攣していた。電気の魔法をかけられたのか、体が麻痺しているようだった。

お喋りはもう終わりにしてもらひていい?

不満そうな声が響いた。

そんな声など構わず、梓月は藍依の額に手を付けた。

「・・・月夜に欠けし光、ここに集え」

梓月がそう言うと、溢れんばかりの光が藍依を包んだ。

その光は藍依の傷を癒すように、肌に溶けていった。

「……あなた光魔法も使えるの?」

梓月は藍依をゆっくりと地面に寝かした。

そしてふつと笑って天使の方を見た。

「光と闇を操る精靈、デス＝ムーン。お前ならそんぐらい知つてんだろう。音憂」

ふと見せる惹き込まれるような優しい瞳に、天使はどきっとした。
死月は一步一步天使に近づく。

!

動こうとしても動けない。彼に金縛りをかけられたようにびくんと動かない。

「音憂、今度は俺の番だな」

そう言ってにつと笑うと、触れるはずのない天使の手を掴み、彼の首に触れさせた。

「・・・何が、したいの?」

微かに天使の手は震えていた。

「お前の好きにしろよ。煮るなり焼くなり、さ。音憂、今度は俺がお前を信じる番だな」

キミが実現したい事…叶えてください。

幼い頃、音憂として生きていた頃の言葉。

その言葉をふいに天使は思い出した。

今度は俺がお前を信じる番だな。

あの時の真似なのか彼は笑いながら言つた。

「お前が実現したい事なら俺、手伝うからさ、全力でやれよー。」

そう言つて、彼は目を瞑つた。

彼は死ぬ覚悟をしたに違ひなかつた。

いや、死ぬ事は構わなかつた。

彼女がそれで苦しみから解放されるのなら。

彼女の使命を成し遂げられるのなら。

彼女が幸せになれるのなら。

自分が受け入れてもらつたようだ。

彼女にもそれができるのなら。

・
・
・

ぽたぽたと涙が落ちる。

彼は目を瞑つていたため、何が起こったか何も分からない。

「…馬鹿」

微かに聞こえる小さな声。

「我の望みを叶える為に、翼を汚して祈りを空に届けましょー…」

泣きながら彼女は歌いだした。

空遠くまで響き渡る歌声。切ない悲しみの旋律。

華が咲き乱れ・風が吹いて舞い上がり・空が揺れて希望の光を射し

天使がその歌声を 祈りにして神に届けるのでしょう

…さよなら、獅樹 シキ

ありがとう

幸せに犠牲は付き物だから。

天使は光となり、光は宙に弾けた。
羽が舞う。華が舞う。

彼が次に瞳を開け、その世界を見た時には、天使は目の前からいなかつた。

小さな少女。

華のように笑う桜色の少女はもういない。
翼を汚して、祈りを空に叶えたのだろうか。
溢れる抜け落ちた白い羽。
微かな涙の跡。

瞳を開け、彼が見えたのはそれだけ。

精霊の記憶を奪われた。

天使によつて。

彼は 精霊の呪縛から解放された。

それは天使の願い。

1人の少女の願い。

少女 華の少女 華の天使 と関わった全て
嬉しくても 辛くても 泣きたいほど幸せな時も
彼には何もたつた1つでも
もう

思い返すことはできなかつた

あんなに救われた

彼女の笑顔さえ 彼の記憶から消え去つてしまつていた

獅樹君。 ずっとずっと 大好きだよ。

音憂の傍にずっと居て下さい。それが私のお願ひ事です！

さよなら。 華の少女

お読み下さりてありがとうございます！

華は元々こうなる事を望みました。

わざと演技をして、梓月に嫌われたかったんです。
自分を罵つて欲しかったんです。

そうすれば、梓月とのけじめが付けられると思ったのだと思います。
ですが、梓月が本当の自分　音憂の事を守るつとこつ気持ちに揺
れ動きます。

本当は嫌われたかったのに。悪者になりたかったのに。
それでも梓月は、華のことを信じたんです。

けれど決意は変わらず、結末は同じです。

結果は変わらなくても、華の心は満たされたのだと思します。

次回も宜しければ見てください。

21・仕組まれた恋

綺麗な空だな・・・。

風は気持ち良いし・・・つつーか!!」
「？」

「えーっと

ああ。そうだ。

藍依と一緒にここに泊まつたんだつけな。
ん? 他に誰かいたような・・・。気のせいかな?
つていうかさ、藍依何処だ?

お! いたいた。

・・・ん? なんか倒れてるし。大丈夫か?

* * *

「藍依! どした?」

梓月は藍依に近づいた。

藍依はの服には泥がついていたり、所々破れていたりしたが怪我は
無さそうだった。

「・・・? 梓月だ」

梓月をじっと見つめた。

「おう。藍依だ」

お互に顔を見合わせる。

「・・・何か不思議。変な感じがする」

藍依は何故か心がスカスカしていた。

大切な何かを失ったような感覚。

「ああ。俺も思った」

沈黙が訪れる。

「何が変なんだろう

「んー。何だろうな」

2人は思考を巡らせる。

藍依は、何故か分からぬ事について考える自分達が変に思えてきた。

「つふ、あははっ。何か私達可笑しいね」
藍依がふいに笑い出す。

「まあ、いいんじゃね。お互に何事も起きてないわけだしな」
お互いが無事に生きている事にさえ何故か安心していた。

「どうか、私なんであんな所で寝てたんだろう?」

「俺なんてコンクリートで寝てたぞ」

「あははっ。それ、梓月らしいね」

「それ、どういう意味だよ」

梓月と藍依は軽く言葉を交わした。お互に気を遣わなくていい、自然体で話す事ができる数少ない存在だった。

何かが可笑しいなんて、誰も気づかなかつた。

その記憶さえなくなつていてるのだから、気づくはずもない。

「そういえば、私達今まで何をしていたんだろうね」

「ああ。あれだろ、あれ」

「?」

「デートだろ、俺達の」

冗談まじりに梓月は言った。

「ばつ!ばか。何言つてんの」

照れているせいか、ぽかぽかと梓月の背中を叩く。

梓月は「ごめんごめん」と悪戯っぽく笑った。

「藍依。ありがとな」

梓月はにっこり笑って藍依を見る。

彼のふとした笑顔にどきつとする。

「・・・え」

「お前が居てくれて本当に良かつた」

「それは…私の台詞だよ
呟くように藍依は言った。

「ん、どういう意味？」

「なつ何でもない！うへ…。

しつ梓月つてさ、これから…どうするの？」

藍依は声が裏返りながら、話題を変えた。

「どうもなにも。ま、適当に働いて、気楽に生きてくつもつだけど

「適当に働くって、何して？」

「んー。郵便屋とか？」

「あー。梓月に合つてやう…」

その時の記憶は2人には無いらしい。

「…でもね」

照れながら藍依が言った。

「梓月には、私の村で働いて欲しいなつて思つて

「へ？」

「い、いや。もしよかつたらなんだけね。

あのね、私の故郷の村、フェリスっていう村なんだけど、そこに梓月が居てくれたらいいなつて思つたり…して

梓月は興味なさそうに藍依を見つめた。

「ふーん」

その表情を見て、藍依は少し落ち込む。

「来てくれる訳…ないよね」

藍依は肩を落とした。

「そんな所、興味ねえし」

梓月にしては冷たい口調で言った。

無性に悲しくなつて、泣きたくなる。

「そつか…何かごめ」

「どんな場所でも構わねえよ。藍依が望むならどこでもつけていく

から」

そう言って藍依を抱きしめた。

「…わっ」

梓月は藍依を高く持ち上げた。

「…藍依

* * *

梓月は藍依を。藍依は梓月に、互いに惹かれていった。
何か、そして大切な誰かを失つて手に入れた恋。

彼の恋は錯覚したものかもしれない。

間違えがあるとするなら、彼が少女を忘れていなかつたら
少女以外に惹かれていかなかつた事。

誰かによって操られた心、それ故に結ばれた恋なのかもしれない。

その恋を結んだのは誰？ 望んだのは誰？

彼と彼女を出会わせたのは誰・・・？

21・仕組まれた恋（後書き）

お読み下さりありがとうございました！

梓月くん全く華ちゃんの事忘れていらっしゃいます！（笑）
あんなに華は彼のことを想つていたのに・・・。

ついつい作者自身、悲しみといつか憎しみを抱いてしまいます（笑）
彼は藍依ちゃんを好きになつてしましました。

見事にあの子の戦略に引っかかりました、という事です。

彼女はこの結果を望んでいたのです。

彼が1人にならないように。だれかと幸せになつて欲しいから。
だから藍依ちゃんと梓月を引き合させたのです。

彼女には未来を予知する事ができるから、その力を利用した作戦で
す。

初めて会ったその日から、こうなる事を望んでいたのです。

宜しければ次回も読んでみて下さい。^ ^

「これはどうだろう？」

「ああ。 そうだったね。 私は生き抜いたんだよね。

ふう、よかつた。 やつと終わつたんだね。 獅樹君も藍依ちゃんもお幸せに。

心からお幸せを願つています……。

少女は大きな樹にもたれかかる様に座つていた。 その樹の周りには一面に芝生が広がつており、蝶が飛び交つていた。 その場所はまるで天国のように優しい光が射していた。

樹には綺麗な花が咲き乱れており、空は透明な青だつた。

少女はそこで唄をうたつっていた。 裏声で歌つていて綺麗で澄んだ声だつた。

その唄はかつて藍依と出会つた時に一緒に歌つた唄で、心を通わして歌つた曲だつた。

この唄は華人として生きていつた中で覚えた曲で、華人に誇りを持ち生きる、などの

華人で代々歌われてきた唄。 歌わなければいけない唄。

この国に奉仕をする種族、機関として『華人』という名が付いた。自然を守り、草や花、樹などと同じ田線で接する種族。

環境が悪化していくこの国では、重要な使命をもつた者達だつた。

歌詞事態は音楽は好きではなかつたが、曲のメロディーは気に入つていた。

「この顔をつたうと思い出すのだ。遠い昔を。

* * *

少女は駆け出す、大好きな友の所へ。今日は待ちに待っていた休日なのだ。

「獅樹くんっ」

少女は可愛い声で少年の名を呼んだ。その声に気付き少年は振り返る。

そしてにこっとお互い笑った。2人は昔からの幼馴染で、この自然が溢れるこの村には

同じ年位の子供は2人しか居なかつたのだった。

2人が今立っているのは獅樹の家の玄関の前で、その周りには花が咲いており、白い石で出来た踏み場を渡つて、家の前から玄関まで行くのだ。

音憂はひらひらとした柔らかい色合いのピンクのワンピース着ていて、髪には白と水色の造花の花のピンが刺さつている。

音憂は獅樹の玄関の前に居るのだが、獅樹までの距離が遠い。

なぜなら家の前から玄関までが100mはあるからだ。

獅樹は深い灰色のスーツを着ていた。しっかりとネクタイもしており、紳士的な雰囲気をかもし出している。

顔に幼さがあり綺麗な瞳をしていた。純粋な少年。女の子のようなくわいらしい雰囲気はあるものの、凛とした強さも感じられ、大人顔負けの知識を持つ少年だった。

獅樹の家はこの村一番のお屋敷だった。

小さな村なのでたいした建物も無いが、その中でも獅樹の家は村

に住んでいるとは思えない立派な住宅だつた。

2人は両親の了解がとれたようで、家から公園まで遊びに出かけた。先日から遊ぶ約束をしていたのだ。横に並びながら2人は歩いている。

「獅樹くんスーツで大丈夫？暑くない？汚れちゃわないかな」眉を細めて、心配そうに獅樹の顔を見つめる。そんな心配している音憂に微笑んで獅樹は言つた。

「後々こっちの方が便利なんだ。そういう。でさ、公園行つた後に音憂と行きたい所があるんだ。少し遠いけどいいかな？」

その言葉にきょとんとした表情を浮かべる。

「…でもお母様達の了解とらなくて大丈夫かな」

心細いような声で言い返した。

「僕にまかせてよ。だつて今日は音憂の誕生日だろ？ちよつと羽田はずすくらい、平氣だよ」

「はめを、はずす？」

音憂は1人で唸る様に考え耽つっていた。2人はまだ5歳だ。意味が分からなくともおかしくない、むしろ知つている獅樹の方が変わつてているのだ。

いつものように公園のベンチに座つた。そこでこの村名物のクレープを食べていた。

クレープといつても卵は使つておらずに、秋にたくさん採れる胡桃をふんだんに使つている。

狐色に焼けた、薄くもちもちとした食感が人気を博している。

「苺おいし〜」

ふにゃ〜とした表情で音憂は言つた。そんな音憂を見るのが好きな獅樹は、嬉しそうに音憂を見ていた。

「クリーム、付いてる」

口の端に苺クリームが音憂に付いていた。クリームを指でとらざずにぺろっと舐めた。

「ふえ。あ、ありがとおー」

まだ5歳のせいか、とくにその行動を気にしなかつた音憂。
ちょっと驚かそうとしたが、見事に失敗した少年、獅樹。

（んー。恥ずかしがる音憂見たかったのにな…）

逆に獅樹が恥ずかしくなつてくる。獅樹は音憂が好きだったが、
音憂は友達として獅樹が好きだった。純粋な恋心を抱いている少年
だった。

「ご馳走様でしたー。ありがとね、獅樹っ」

にこつと笑いかける音憂。純粋な笑顔にどきりとする獅樹。

「う、うん。音憂が喜んでくれて良かつた」

（くあー。あの笑顔は反則だろ…）

* * *

「ねえねえ、獅樹ここは？」

見た事もない町並みに驚きを隠せない音憂。

そこは人がたくさん賑わつており、建物や家などが続いて並んで
いる。

「すつごいねー」

音憂は見慣れない所に来て少々興奮ぎみだつた。

「ここはぶどう酒で有名な街、シャワール。陽気な人達が多くて
治安はいいつて。

音楽好きな人が多く、楽器職人がここで勉強しにくる場所なんだ
つて。そもそも木管楽器の材料に使うヴェルアという樹が…・・・

* 只今勉強中・・・

「ふええ。獅樹は物知りだねえ。すつごいねー」

「3分で覚える音憂の方がすごいと思うけどね」

獅樹が話した内容を丸々覚えてしまっていた。1回話しただけで、音憂は安易できてしまふ能力があった。

音憂の能力には驚いてばかりだ。音憂と獅樹が始めてあった時、音憂が獅樹に話しかけた一言目が「獅樹くん、初めまして」だった。あつた事もない少女に名前を言われて戸惑つた獅樹。でも可愛らしい雰囲気や純粋な心はその時から変わっておらず、すぐに打ち解けた2人だった。

街中を歩きながら2人は話していた。美男美女の2人（といっても子供だが）は周りの目線を奪っていた。

中には2人に敬意をしめしている人もいた。音憂は戸惑っていたが、獅樹は当たり前のようすに平然としていた。

そう、獅樹は世界の中でも有数な会社『魔輝石』を扱う大企業の社長の息子だったのだ。

* * *

「音憂、誕生日おめでとう」

その言葉と共に、扉が開かれた。扉の向こうは大きな個室となつており、執事が2、3人立つて軽く礼をしていた。個室の中央にはガラス張りの何かが置かれていた。

2人は近づき、ガラスに囲まれている何かを覗き見た。

「わあー。すごいねー」

透明で薄いガラスから見えるのは、美しく輝く宝石だった。正しくこれは魔輝石という物で、身に付けた人の潜在能力を發揮する事ができるとても貴重なものだった。

「父さんから了解をもらつたんだ。『音憂ちゃんの誕生日なら、

仕方が無いか『だつてさ』

「ふえ。貰つていいの？」

「うん、一個だけだけどね」

一個だけでも丸がいくつ付くか分からぬ。

「わ〜。ありがとー」

音憂は魔輝石を眺めていた。その中で選んだのは、ピンク色の真珠の上にルビーで作られた薔薇がついている指輪だった。

「かわいいーの、これ」

飛びつくような勢いで獅樹に抱きついた。

「本当に本当にありがとー！」

可愛い声で何度も繰り返す。音憂にとってはこれが最高の誕生日になつた。

生涯で一番の宝物。だつてキミがいてくれたから。

いつからだらり、キミが離れていった日は。

いつまでも、この時のキミの事は忘れないよ。

22・幸せの記憶（後書き）

お読み下さりありがとうございました！
とりあえず、音憂ちゃんお疲れ様です。
彼女は使命をやり遂げました。

話の前の方で唄がでていますが、実は藍依ちゃんが何話かで歌つております。

この唄は2人の絆を表している歌です。

余談ですが、設定上では藍依ちゃんの方が歌が上手いです（笑）

そして音憂ちゃんの過去が出てきました。

村で暮らしていますが、裕福な所で暮らしています。

そして獅樹くん！いわづとしれた梓月の過去の過去です（笑）
精靈化する前の人間として、音憂ちゃんと幼馴染として関わっていました。（実は…）

その後に精靈化して、凶暴になつてしまいますが・・・。

精靈化した彼と音憂ちゃんの話は、何話か前で出ています。
また凶暴化した彼が出てくるので、振り返つてみると繋がつて面白いかもしません（笑）

長くなつてすみません・・・。

宜しければ次回も読んでみて下さい。^ ^

23・絶望の記憶

獅樹くん 獅樹くん 獅樹くん。

こわいよ。す、ぐ、く、わい…。私はここにいないとけないんだって。
お父様もお母様も、みんな。誰一人助けてくれないよ。
ここで、生きなきゃいけないなんて…。
いやだよ…。

そんなのいやだよ。

大好きな獅樹くん。今でもこの気持ちは変わらないよ。
どこにもいかないで、私の傍にいてほしい。ずっと待っているから。

ひとつで、まつてているから。

* * *

懐かしい幼い声、頭の中で繰り返される。
そう、私の…音憂の声。

何で繰り返されるのだろう。これは罰なのだろうか。
愚かな答えを出した、私への。

鳴り続ける私の記憶。誰か止めて。声を止めて。
いや…いやなの。

何で、何で…。

死んでしまったら思い返さないといけないの…?
こんな記憶なんて、綺麗に消えてしまえばいいのに…。

* *

「獅樹くん最近体調が良くないみたいなのよ、心配だわ」
お母さんがそう言つていた。あ、そっか。

獅樹くんに最近会えなかつたのはその理由だつたんだ！
私は苺ジャムを塗つたトーストをほおばつていたのだけど、朝食を
残して獅樹くんのお家に向かつた。お母さんが私を呼んだけど、頭
に入らなかつた。

私は家を飛び出した！

そして息を切らすぐらい、私は走つた。走るのは得意ではなかつた
し途中吐きそうになつたけど、頑張つて走つた。

ふ…あ…シキく…ん、獅樹くん！

私は獅樹くんの家のインターホンを押した。

「…音憂さんですか、少々お待ちください」

獅樹くんのお付の人の声が聞こえた。オートロックの扉が開いた。

「どうぞ、お入りください」

いつもなら扉の前まで獅樹くんが来てくれるけれど。
体調が悪いだけなのかな？風邪なだけ？

でも、何だかどつても心配なんだ。私の気のせいでありますように。

「お邪魔…します」

私は靴を脱いで、部屋の中にお邪魔した。

目の前に、顔見知りの執事さんがいた。夜乃さんという人で、とても優しくしてもらつている人。でも、いつものにっこりとした笑顔
は無かつた。

「ふう…。どうしましよう」

獅樹くんのお母さんの声がした。

案内されたその部屋には、獅樹くんのお母さんがいた。
とても美しい人で、優しくて憧れの人。
でもいつものような、明るい表情は曇つていた。
何かがあつたんだ…。

私は予感を確信してしまっていた。何も告げられてはいないのに。

「お母様、こんにちは」

軽く私は礼をした。獅樹くんのお母さんは振り向いて、必死の笑顔を作ってくれていた。

苦しそうに、笑っていた。

「いらっしゃい。音憂ちゃん」

体中から絞つたような声。その声を聞くだけで心が痛かった。

「獅樹くんは、どうしたのですか？」

私は早く本当の事が聞きたくて、質問した。

やつぱり言いづらそうで戸惑っていた。ふと悲しみの目を私に向けて。

私に話しかけてくれた。

「あのね、獅樹は もう……人間では無いの」

え・・・。

思考がとまつた。体中の血液も凍りついたようだった。死んでしまった？

?誰が？獅樹くんが？何で、どうして！

なにも言葉に出なかつた。流れるのは涙だけ。

「ふつざけんじやねえーよ！」

あ・・・。

この声は、獅樹くんの声だ！良かつた！死んでなんかなかつたんだ！私は声のする所へ走つた。

良かつた！会いたい、獅樹くん！

「獅樹くんっ」

私は扉を力いつぱい開けた。

ガチャーン

重い扉が開いた音が鈍く聞こえる。

何もかもが遅く見える。時が停まつた様に。スロー再生を見ているみたいだ。

黒と茶が混じつた綺麗な髪。

私よりも少し高い身長。

獅樹くんだ！

つり上がった瞳、壊れてしまった人形のような顔。
絶望に酔いしれた、疲れきつた顔。

物が散乱している部屋で暴れまわっている。叫び声が聞こえる。とても苦しくて辛い声。

…あなたは 誰？

‘お別れは悲しくない、決して。今ここにあなたがいるから

「お誕生日おめでとう。音憂」

大好きな獅樹くん あなたの事は忘れない。

23・絶望の記憶（後書き）

お読み下さりありがとうございました！

獅樹くんはもういなくなってしましました。
彼は精霊化しました。ですが、精霊として音靈ひりやんと、これから
どうやって関わるのでしょうか。

そして、彼には両親がいるのに、何故記憶喪失になつて草むらの上
に倒れていたのでしょうか？（一話参照）

これらの謎は、これから分かると思います！

次回も宜しければ読んでみて下さい。^ ^

24・彼女の希望

獅樹くんは変わってしまった。もう、人間ではない……。

私はその後色々教えてもらつた。獅樹くんの病氣。

元々獅樹くんは体が弱かつたらしかつた。

それは悪靈に侵食されているからで、何故悪靈が獅樹くんに近づいたかというと、獅樹くんのお母さん 葉樹さんは精靈契約のできる人、精靈士だったからという事だった。

今は精靈との契約を打ち切つていて、もう関係ないと思つて、精靈士の使う杖を葉樹さんは捨ててしまつた。

しかし、その杖には精靈が宿つており強力な力が込められていた。つまり精靈は見捨てられたと思い葉樹さんを恨んだ。その結果が今の獅樹くん。

もう完全に精靈と融合してしまつたらしい。

私がこれらのこと実を知つたのは3ヵ月後。
私はショックで倒れてしまつていった。

* * *

「うつ」

少女は痛々しい声を響かせた。記憶が巡つているのだろうか。荒々しい呼吸をして、顔を伏せた。

「これ以上見せないで！」

これからもつと苦しい記憶が待ち構えているからだろうか。

「獅樹くんは、ずっといるから…私、独りじゃないから。大丈夫…」

少女は一筋の涙を流す。

「獅樹君は消えてなんかいない！」

少女は叫びだす。目の前にある現実を受け入られないよう^{。アリ}。「これ以上、思い出させないで……私の心の中の獅樹くん死んじやうから……」

そうついつて、貰つた指輪を手の中に埋^{ハサ}めて泣き叫んだ。

それでも記憶は再生される。

これは死した者の使命だから。過去を受け入られる強さを持たないといけないから。

一度逃げる事は許されないから。

* * *

「おはよう。音憂

・・・真っ暗だ。

何も見えない。獅樹くんがいなくなつても朝は来るんだね。時は進むんだね。

神様、戻して欲しいです。獅樹くんが居る時に。

そして、時を停めて欲しいです。そしたら永遠に一緒にだから。

獅樹は死んでいないよ。

だれ……？

獅樹のために生きてみなさい。獅樹を幸せにするために、生き抜いてみなさい。

獅樹くん、死んでないの？

心を隠されただけだ、獅樹自身は近くにいる。救つてやりなさい、導いてやりなさい。

「どうやって？ 教えて、教えて下さい。

もちろん教えてあげるさ。音憂。君は彼のために命を懸けられるかい？

・・・獅樹くんが幸せになれるな。

それならいづすればいい。これから君は

* * *

「ぱっ！」少女は布団から飛び起きた。
すると彼女の母親が、悲しそうな複雑な表情をみせて話し始めた。
少女は「もう知っているから大丈夫だよ」と微笑んだ。
2人が歩いて向かったのは亡き父親の部屋だった。
「ここに、いるよ」

扉を開け、部屋の中に入る。

少女の視界に映るのは、金髪の少年。後ろ向きで顔は分からぬ。
「初めてまして、私、音憂って言います」
きょとんとした表情で音憂を見つめる。
「あなたとお友達になりたいです」
少女はにつこりと微笑んだ。初めからやり直す事も受け入れた。
金髪の少年の顔が獅樹だとしても。
彼が自分を忘れていても。

彼は人間でなくても。

彼が幸せになるために、少女は自分の全てを懸けて、生きていった。

24・彼女の希望（後書き）

お読み下さりありがとうございました！

音憂の記憶が再生されています。

これは音憂の過去を読者様に伝えるといつ理由もあつてなのですが。
・・。

音憂は苦しんでいます。彼女が決めた事とはいえ、獅樹を失う事は一番辛い事なのです。正確には獅樹が梓月と同一人物と改めて知る事が、ですね。

梓月はきっと、華人の事なんて忘れて藍依ちゃんと幸せに暮らしているのではないでしょうか・・・？

次回は神様（？）と以心伝心した音憂ちゃんに隠し能力が授けられます。

宜しければ次回も読んでみて下さい。^ ^

キミはもつ、獅樹くんではない。

本当は思い出して欲しい。あの頃の獅樹くんに戻つて欲しい…。
君が獅樹くんでなくても、私は獅樹くんに助けられたから。
君を救いたい。幸せにしてあげたい。それが私の望み。

* * *

精靈

近づいてくんないよ…。わっせからなんだよ。

「ねえねえ。キミって何がすき?」

「は?」

「食べ物何がすき? 私、作れるものなら作るよー。」

「…・腹減つてねえよ」

うざい。俺に喋りかけんなよ。

つていっかさ、疲れた。色んなことに。

なんかどうでもよくなるな…。

顔を上げてみると、あたりは一面桜。

「(ヒ)ビ」

そいつに聞いてみる。

「(ヒ)ヒは桜のきれいな春! そして優しく吹き渡る春風!」

異様にはしゃいで答えてるそいつ。

(季節なんか聞いてねえ…)

質問には的確に答えてくれ…。

「風の舞う庭っていうのー綺麗だよね」

そう言って、そいつは目を細めた。

こつは中々話が通じないようだ。

その桜を見上げてみる。

ひらひらと舞う桜。

咲き誇る華、花一つ一つに命が宿つているよう・・・。

・・・綺麗つちゃあ綺麗だよな。見事に満開。

最初は意識が無かった。

目を開くと、目の前に2人の影があった。

そこは真っ暗な部屋で、何もかもが終わっていた。

胸に残るのは、むなしさと後悔だけで。やりきれない思いだった。

手が伸ばされた。

こんな俺を救つてくれるような。

白く小さな手。

そして、ここまで連れて行かれた。

桜の満開な庭に。

ここにいる理由は家族との喧嘩からだ。

俺のことが嫌いだったんだ。あいつら両親は。

俺もあいつらが嫌いだったから、家にほとんど帰んなかった。
友達と遊んで、無茶やって。

「あなたの事、もう手に負えないわ・・・さつさと消えて」

俺はついに親に捨てられて、ここで暮らす事になった。

母親の親友の家に養子として引き取られた。

つまりこの女、音憂つて奴の家。

音憂と俺は友達だったらしい。

俺は、所々記憶とんでもるから、覚えてなかつた。

何日が経つても、何年経つても俺は自分の名が分からぬでいた。

だれも教えなかつたし、知りたくも無かつた。

俺はこの女と母親と暮らしていた。

何か違う、俺は違う存在だ。
他の奴らとは違う。

人は違う……。

そんな確信はしていた。

* * *

前臺

精靈君とじょよく話すようになった。仲良く馴れたのかは分からぬけど……。

私は精靈君のことを『キミ』って呼ぶようになっていた。
ついつい『シキくん』って言っちゃうくなるけど。
精靈くんの名前はない。私には付ける権利なんてないし、精靈くんも名前なんてどうでもいいと言っていた。

お母さんは精靈君のことをレイ君って呼んでいる。

ふーむ、『せいれい』のれいからとっているんだよね。たぶん。
やるな、お母さん！ねーみんぐせんす抜群ですね。

よし！只今7時00分！起床の時間です！

「おはよー！」

あ、起きてたんだ。珍しい。

「はよ

わあー。挨拶してくれた！これで465回中3回目の挨拶だー。

今日は、わんだふるな1日になるぞー！

「つてか勝手に部屋入つてくんなんよ……」

「はっ、ごめんなさいー」

ついつい精靈くんを起こす癖がついてしまって。すいませんー。
そう言って私は扉をしめて、扉に寄りかかる。

ドガツツ！

いつたあー。扉が開いて頭に直撃する。

これは精霊君の癖で、私をからかつてると思われます！

「とろい」

「むー。今度キミにもやつしてやるからな」

「やつてみろよ」

軽く笑つてくれた。悔しいけど、やつぱり嬉しい。

…私、嫌われてないよね…。

階段を下りるとお母さんが朝食の準備をしていた。

「おはよーです。お母さん」

「おはよー、音憂」

お母さんは精霊君に笑顔で「レイ君おはよー」と言つた。

精霊君はいつものように咳くように挨拶した。

うん、大丈夫だよね。普通の家族みたいだよね。

もう、獅樹くんみたいに家族を失わせないから。
精靈だからつて子供を捨ててしまつた獅樹くんのお母さん。

きっと理由はたくさんあると思う。

精霊化してしまつた息子に失望してしまつたのかもしれない。
きっと疲れてしまつたんだよね。自分にはこの子を愛せない、育て
られないって思つたんだよ
ね。

精霊化してしまつている人は差別をうけやすいし、精霊化が進行し
てしまつたら殺されてしまうから。

『華人』っていう団体の人達に…。

でも、捨てられた子供はもつと悲しいと思つ。苦しいと思つ。

精霊君は記憶を忘れてしまつてゐるから、苦しくないかもしれない。

けど、どこかで分かつてゐると思つ。傷つてゐると思つ。
私がみぞを埋めてあげたい。

でもそれは獅樹くんのためでも、精靈君のためでもなく、自分のために。

* * *

やつぱり私、嫌われていたのかな。

私の大事な人形をぼろぼろに引き裂かれてあつた。お父さんから買つてもらつた人形。

お父さんはもういない。だからこれが最初で最後のプレゼント。

ピンク色のふわふわの兔人形。

今は綿がでて、目が取れている。。。

泣かないよ、もう。

絶対、精靈君と仲良くなるんだ。

それから人が変わったように、精靈君は暴れだした。
きっと1番辛いのは精靈くん。

昔の事を思い出しているのかもしけない。。。

両親に捨てられたなんて、私だったらたえられないよ。

「お前、気持ち悪い。うせう」

そつか…」めんね

「…お前は綺麗じやねえよ。良い子ぶつてんじやねえ。
気持ち悪いんだよ。ひとつと失せん…。」

そう…だよ。私、綺麗なんかじやないよ。良い子でもない…。

あなたが幸せになれるのなら、わたしを好きだけ使って。
ぼろぼろに使っていいから。使い捨てで良いから。

ただの **あなたの道具**です。

* *

それからは死が恐くなかった。何も恐いものがなかった。
精霊君が笑っていられるのなら、何でも努力した。
いつか、この想いが通じますように・・・。

キミに力をあげよう。2つの力。ここまで音憂、頑張ったね。

ありがとうございます。

そして、これからキミは大変なことに巻き込まれる。

え、そりなんですか。でも、覚悟はします。

生き抜いてみなさい、あなたの望むままに。

はい、私の意志を貫くまで負けません。

神様、道しるべをありがとうございます。

25・ナリの玉露こ（後書き）

読んで下さつてありがとうございます！
音憂ちゃん頑張っています。

死を恐れる事が無くなつた、と音憂ちゃん言つていますが、きっと
それぐらい彼を助ける意志が強いのだと思います。

この話の後半は8話の音憂ちゃん視点です。

次回は、音憂ちゃん『華人』と関わりを持ちます。

大変な事に巻き込まれちゃいます。

神様が予想した通りにです。（笑）

次回も宜しければ見てください。＾＾

26・桜色の手紙

「音憂」

「へ？だれかが私を呼んでる。うにゃー。眠いのに・・・。
夢から覚めて、私は目を開けた。

・・・顔が近い。目の前には精霊君がいます。おっと、勝手に部屋
に入るなつていつたのはキミじゃないか。

「はよ」

いつもぶすっとしている精霊君が・・・。何故？突然の笑顔に私は
びっくりする。

「...おはよー」

精霊君、寝ぼけた私の声にせいか、笑ってる。珍しい。
「意外とねぼすけさんだな」

「ふあっ！」

「いつも私が起こしてるじゃないかー！」

これには私だって力チンと来ますよ、だつていつも私がキミをおこ
しているのに・・・！

「あの、でも」

「あ？」

「どきませんか？そー」

今、精霊君が覆いかぶさるように私の前にいます。それに顔が近い
よ・・・。

「嫌つて言つたら？」

「...強行突破です」

ふつと精霊君が馬鹿にするよつて笑う。

「お前には無理だろ」

またまたケンカをうつてるのですか。お兄さん。私だってやんひつと
思えばいくらだつて・・・！

「えいえい」

精靈君を押してみる。

「どーいーして」

ぴたりとも動かない・・・。」うちちは本氣なのに。ゼエはあーゼえ
はあー。

「こんなもんかよ、お前の力は。弱つちいな」

ふ..どうせ私の力はこんなもんですよ。非力ですよ。握力10もな
いですよ...。

「何で、お前なんだうつな」

「え?」

「俺、女に泣かされた事ねえぞ?」

昨日の事...?

「お前、度胸あるんだな。見直した」

あ...そうだったんだ。

「お前自殺しようとしてんのかよ?」

「え..そんな事無いよ」

「首に刃物突きつけられてんのに、平常心なとこすげーな。俺、で
きねえよ。そんなこと」

「えへへ」

「何笑つてんの」

「キミのためならできぬ...よ。それにキミだつたら、私を殺さない
つて思つたから」

「...お前」

「?」

「俺の事、好きなのかよ?」

あきれた顔で精靈君は言いました。といいますか、知らなかつたん
だ。

「うん!大好きだよ、キミの」と

「!..」

さけるように私から離れていました。

...そ、そんなに照れなくても。しつちが恥ずかしいよ。

「あ、あのな。俺、決めたんだ

「何を？」

「これから、しばらく修行すんだ」

「へ？ 修行？

修行というと、あの滝に打たれるあの修行…？

うわー。人が変わっちゃったみたいだ。精霊君が修行をするなんて

…。

「何の為なの？」

「それは、秘密」

精霊君は教えてくれないまま、部屋を出て行きました。

何でだろう…。

(あ、そうだ。お礼言わないと…)

私は心を集中して瞑想メイティーションをした。

私にとっては、馴れればそんなに難しくない事だった。

瞑想をすると聞こえてくるの、だれかの声が。

最初は少し恐かつたけど、声をかけてくれるのは優しい人だったから安心した。

昔から、私はその人と話すことができた。

お父様が死んでしまった、あの日から…。

あの、神様。今までありがとうございました。

あなたの応援がなければ、私、あきらめていました。

それはよかったです。でも彼を変えたのは、あなたの力があるからだ。

2つの力は使ってみたかい？

まだ、です。どういう時に使ってみたらいいか、分からなくて。

それに、使いづらいです。

人の過去、未来が見える力なんて、…私にはもつたない力です。

そうか、だが、いつかは使いたくなる時が絶対来るさ。
彼の未来を守るためにね。

… なんですか？ えへへ、それではその日までとつておきます。
えと、それでは、失礼します。

外に意識を向けて、心の目を閉じる。

そうすると、会話を終わらせる事ができる。

今日は長かったかな？ふう…少し疲れた。

やっぱりあの人は、神様なのかな…。

ほんやりと思いに耽ながら、ベットに倒れる。

「信じて、もらえないのかな…」

馬鹿にされるのが恐くて、だれにも打ち明けた事が無くて1人で抱えていた。

神様と話ができるなんて、信じてもらえないと思つていたから。
神様つて本当にいるのかなー。

わーー！でも助けてもらつてるのに、疑り深いよね、失礼だよね！
でも……だけど思い返すと偶然が重なる…。

お父様が亡くなつたあの日に声が聞こえたから。

信じてみたい、神様は…もしかしたら、死んでしまつたお父様なの
ではないかつて事を。

似ている、とっても似ている…喋り方とか、声とか。
弱い私を応援してくれているのかなつて。

お父様が私を寂しくさせないようにしてくれるのではないかつて。
やつぱり自己満足かもしれない、ただの願望かもしれない。
でも、もしそうだったら、嬉しいな。お父様とずっと繋がつていら
れるから。

* *

届いてきた一枚の手紙。それが私の運命を変えるなんて思いもしていなかつた。

「音憂。音憂宛の手紙、来てたわよ」

ほえ？ 私に手紙なんて珍しいな。可愛らしい桜色の封筒だ。手紙開けるときってわくわくするなー。ペリペリペリ…ひょいっ！あれ？

「何だよ、ラブレターか？」

精靈君！

「わー私のー」

ジャンプしながら取るのとするけど、ふうひつ！ 取れない！ 精靈君、最近あまりに背が伸びてるからなー。よし、こいつなつたら強行突破！

精靈君のわき腹にくつ付く！ そしてくすぐるー。

ちよいちよいと邪魔そうにしてます。効果ありでしょーかー！

「はいはい、返しますって」

ふふふ。大成功ですー！ さっそく開けてみますと・・・。

* 羽凧 音憂様 *

冬の寒さが厳しいこの頃、音憂様はどうお過ごしでしょうか？

この度手紙をお送りした理由は、音憂様のお力を貸して頂きたいと

我が会社は考えております。

突然の申し出で申し訳ありませんが、近日改めて音憂様の『自宅へ

伺いたいと考えております。

我が会社は自然保護地球保護を大切にしております。

環境、人類、そして草、樹、花への奉仕をしてみませんか？
国にも認められており、安全な仕事を依頼しています。
音憂様の高魔力を社会にぜひ貢献して頂きませんでしょうか。
良いお返事を期待しております。

天華団体

「…天華団体？」

私は呟いた。

「天華団体つていつたら世界で活躍している組織よー！」

お母さんが言った。

「へー… そうなんだ」

でもこの内容つて、どういう事？

「ちょっと見せて見せて」

お母さんが手紙を覗き込んだ。

「・・・」

「ねえ。お母さんこれってどういう意味なの？」

「音憂」

「？」

「あんた、す」「いやないー！ー！」

「へ？」

「天華団体なんて入りたくても入れない、トップクラスの組織な
よー！」

「はあ」

「お母さん小さい頃憧れてたのよ、はなびとさま華人様にー！何てつたつて華を
愛し、世界中の自然を慈しむ姿！」

世界中が騒がれていた、精靈から守ってくれる天使ー強くて美しい

女性の憧れなのよー！

「でも、それって……」

バンッ

ドアが大きく閉まつた音が鳴つた。

精靈君はばつ悪そうに部屋から出て行つた。

「精靈君っ！」

私は精靈君を追いかけた。

天華団体は精靈を駆除する団体だから、精靈君が怒るのは当たり前の事。

大丈夫だよ。私、天華団体になんて入らないから。

* * *

とんとん

精靈君の部屋のドアを叩く。

「あの……入つていいでしょ、うか

しーん…

(むう、どうしよう)

ドアの前で立ち尽くす。

(入らない方がいいのかな……ううん！強行突破だ)

本音を話したら、精靈君だつて分かつてくれる！

ガチャツ

目の前に映る光景、思いもよらない姿。

いつもの精靈君とは思えない…。

机にうつ伏せになつて、泣いている…？

「あの、」

「・・・」

「大丈夫だよ。私、天華団体になんて入らないよ

「・・・」

「キミの敵になんてならないよ

「・・・」

「ずっとキミの味方だから

「・・・音憂

「え…」

手を引っ張られて、精霊君にぶつかる…?

フワツ

精霊君の体の冷たさが伝わる。

震える体に抱きしめられられて、冷たくて悲しい気持ちになる。

「…音憂も、俺を見捨てるのか?」

悲しい記憶を持つ君。とても辛かつたよね。

でも、大丈夫だよ。

独りじゃないよ、私がずっと傍にいるから。

キミの背中に手を組んで抱きしめた。

ぎゅっと、いつまでも離れないよう。強く強く抱きしめた。

「私、キミの事大好きだから、ずっと傍に居たいな

2人を引き裂くあの出来事が起こるまで、ずっと私達は一緒だった
ね。

26・桜色の手紙（後書き）

読んで下さつてありがとうございます！

音憂ちゃん、彼と仲良くなっています（笑）

桜色の手紙が届きました。

音憂ちゃんの高魔力に気付いた天華団体が出した手紙なのですが、音憂ちゃんが高魔力になつたのは、彼がくれた指輪のおかげなのでしたー。

（その指輪を身に付けると、身に付けた者の潜在能力が發揮されるからです）

音憂ちゃんは華人にはならないって言っていたのに、どうして華人になつたのでしょうか？

神様が予言した事は、何だつたのでしょうか？

それは次回起こります！

次回も宜しければ読んでみて下さい。^ ^

27・音が途絶える田（前書き）

今日は暗い話になつています。

残酷な描^クとまではいかないかもしだれませんが読む際には注意して下さい。

27・音が途絶える日

キミの声が聞こえる。
ずっとずっと、忘れられずに響いている。

「じゃ、俺行つてくんna」

精霊君は悲しそうに笑つた。でも悲しんではいけない。
これは精霊君の望む事だから、私は精一杯応援するんだ。

「修行：頑張つてね」

口元を必死に上げて笑う。作り笑いに見えるだろうか、やつぱり。
すぐ強くなつて帰つてくるから。お前も華人として立派になつて
ろよ」

精霊君は強めの口調でそう言つた。

「護衛士なら敬語で話すのではないのでしょうか？」

からかつて言つてみた。

「はいはい、すみませんね」

そして頭をなでられた。大きくて暖かい手。
手は離され、キミは遠くに旅立つ。

「…待つてるね」

でも、頼つてばっかりじゃいけない。

だからね いつか手放すんだよ

一通の手紙。

キミの傍にいるよと約束してから、私達はずつと一緒にだつた。

精霊君は、子供みたいに私にひついてきて何というか、可愛かっ

* *

た。

でも、ずっと弱いままではいられない。
時は過ぎ、人は変わる。

人は変化を求める生き物だから。

「俺、このままじゃいけないよな…」

桜が咲く庭で彼は呟いた。

私は彼を見ながら話を聞いていた。

「このままじゃいけない

そう、彼は変わろうとしていた。

厳しい過去が彼の心を捕らえようとしても、彼は自分から進もうとしていた。

私は彼が離れていくってしまうのではないか、と思つて心細かつたけれど。

違かった。

最初の目的からズレていたんだ。

私は、彼を幸せにするための手伝いをするだけで、彼を幸せになんてできない。

そんなのは、私のエゴだ。
私のわがまだ。

彼は、私なんていなくて生きていける。絶対に。

今、私を必要としてくれていても、それは意味がない。

彼が独自でも生きていけるような強さを、彼自身から身に付けなくてはいけないんだ。

「俺、前にも言つてたけど…修行に出かけてこようかと思つてる

独りでも生きていける強さを彼ももつと望んでる。

だから、応援しよう。

ずっと、ずっと。

私が朽ち果てるまで。

「うん…いいんじゃないかな」

「何かなげやりだな、お前」

キミは不機嫌そうな顔をした。

「そんなことないよ」

「本當か?」

じつと見つめる、瞳。

ガンバレ

私も、頑張るから

* * *

「華人になりたい」

私は宣言した。

理由は、彼を救いたかったから。

事の発端は少し前。

彼と一緒に居た時に始めて使ってみた。
未来を予知する力を。

軽はずみな気持ちで使ったのだけど、予想外の未来が待っていた。

精霊くんの未来。

でも、精霊君ではなかつた。
完全に、精霊化していた。

暴れて力を爆発させていた。

そこに天使がたくさん来て、彼を止めていた。

どうしようもできない私がそこに立っていた。

今まで私は何していたのだろうと自分自身呆れていた。

そんな未来にはしたくない。

彼は人として生きてほしい。

精霊化を防ぐ事ができるのは、天華団体の天使だけ。

天使というのは、人と聖靈を混せて作る人工的なもの。

私は天華団体に入り、少しづつ知識を深めていった。

時は経ち、ついに精霊化を完全に食い止められる方法を知った。

天使の歌 という術。

天使自身の聖靈力を使い、精霊化と中和させるという方法。

私はその術を使えるようになるために、どんなこともした。醜い事でも、どんな事でもした。

そんなある日、精霊君が修行から帰つてくると手紙が来た。
嬉しくて、どきどきが止まらなかつた。

とても待ち遠しかつた。

引き裂く出来事。

人の心を読み取れる花。

今度は、花と人を混ぜてつくる人工的な存在を作るという企画がで
きた。

私は元々人工天使は好きでは無くて、新しく作られる花人の存在を
作り出して欲しくなかつた。

でも、私は所詮下っ端の人間。口に出す事は許されなかつた。
そして実験台が必要となつた。

高魔力を持つ人間…。

周りは私を見つめた。

そう、私が実験台として選ばれたのである。

私も抵抗した。

必死で生きようとした。

彼に殺されそうになつた時は、あんなに死に恐怖を抱いていなかつたのに。

違うか、きっと私はあの頃とは違つて、欲張りになつっていたんだ。それに私はたくさんの人の叫び声を何度も聞いた。

同じ事だ。

私は最低な人間なんだ。

たくさん大事な事を忘れていた気がする。

もう、拾えない。

多すぎて拾えない。

もう、前には戻れないんだ。

また、私は失敗してしまつたんだ。

汚すぎる、私は。

自分の幸せだけ考えていたから、こんな事になつてしまつたんだ。

音憂… 音憂！

少女は振り返る。

「僕、音憂を守りたいから、僕は護衛士になるつて決めた…決めました」

なにやら、馴れない言葉で話す少年。

少女は少年の言葉に目をまるくする。

「びっくりしたよ… 急に言葉遣いが変わつて

照れくさそうに少年は喋りだす。

「だって護衛士は主人に敬語で話すだろ？それに、ただでさえ音憂

は誇り高い華人になるんだから敬語の方がいいと思つて「少年の言葉に少女はくすつと笑う。

「あははっ。言葉遣いもどつてるよ」

少女の言葉にカチンときたかのよつこきつゝ口調になつた。

「…これから勉強すんだよ！」

その表情を見れて少女はほつとしたよつだつた。

「そつちの方がキミらしこよ」

にこつと笑つて少女は言つた。

遠い日の自分が綺麗に見えた。

「いやあ・・・・やめてえ・・・・つ！」

必死に生きようとした。

とても醜くて、悲しい姿。

自分でも愚かだと思った。

でも、もがいてももがいても痛みはやまない。
止まる事無い。

血が流れてくる。

刃物で傷つけられて。さくさくと痛みが走る。

痛い。

これが痛いということなんだ。

「やだ・・・いやあっ！」

力一杯叫んでも聞こえる事は無い。

ここは防音施設の実験所だから。
だれも助けには来ない。

痛い、痛い。

「・・・！」

血が止まらない。

紅に染まる。

すごい、すごいまつかだよ・・・。

* * *

紅い血、横たわる少女
何もできずに、されるがまま

「音憂！」

バンツー！

どこいったんだよ、あいつ。

あの天華団体つて所で何かあつたんじゃないのか！？

俺が居ない間に何かあつたのか…？

どこだ？天華団体の本拠地は…。

届かなかつた想い、冷たい体。

何もかもが遅かつた、時を戻すことはできない。

「……音憂？」

は・・・何が起こつてんだよ。
何だよこれ?
は・・・はは。

あ、あ・・・

「音
ねうつ
憂うつ——つ……つわあああ——！」

時は戻らない、人が変化を望む限り。

27・音が途絶える日（後書き）

読んで下さつてありがとうございます！

これが音憂ちゃんの辛い過去です。

よく分からぬ存在 花人の実験台にされてしまいます。（この時は正確な名前が決まっていなかつたので花人です）

これから、彼視点に変わる…？と私は思います。

この話の最後は1話目に繋がります。

彼が記憶をなくして、草むらに横たわっているあの日にです。

その時に、華人となつた音憂ちゃんと再開する事が出来ます。（彼は覚えていませんが…）

何故彼は記憶をなくしたのでしょうか。
宜しければ次回も見てください。^ ^

信じられない。信じる事なんて不可能だ。

目の前にある出来事に直視できない俺がいた。

冷たく紅く染まつた音憂。

きつと、もう動かない。

もう笑わない、喋らない。

音憂は何処へ行つたんだろう。

「音憂・・・音憂」

起きるわけが無い。もう、2度と。

誰が、誰がこんな事を・・・。

ふざけんな、ふざけんなよ・・・！

俺は天華団体の実験室から抜け出して、音憂をこんなにした奴を探した。

ただ、がむしゃらに。

許せなかつた。こいつを奪う事を。

怒りをそいつらに向けた。

許せない、もうどうにでもなれ。

こんな事して無駄だとしても、それでも俺はする。

許せないから、ただそれだけだ。

「我々の実験台に手を出さないで頂きたい」

* *

白い白衣を着た、細い体つきの男が言った。

その表情はただ厳しく、冷酷だった。

男の前には、茶色の髪の少年が倒れていて、体中がぼろぼろだった。

「お前ら・・・ふざけんなよ」

低い唸つた声で少年は言った。

少年の周りには薬が散らばっている、おそらく薬のせいで彼は動けないのだろう。

歯を食いしばりながら、少年は拳を握った。

「じいつらが音憂を・・・

「ん・・・？君、よく見たら精霊化の人間か？」

少年は瞳に力をいれて睨んだ。

「・・・だからどうしたんだよ」

その返答に男は驚きを隠せない。

「精霊化した奴は、いつ暴走するか分からぬ。さつやと封印しなければ」

男は目で合図し、長い髪の女性は少年に近づいた。
澄んだ藍の髪で、背には翼を生やしていた。

彼女は人工天使だった。

目を瞑り、呪文を唱えると光が少年を包んだ。

「彼は・・・月の精霊に撰りつかれています」

「そうか、さつさと削除しなさい」

殺す事になにも罪悪感を感じないような態度。

「ですが・・・」

彼女は戸惑つ、精霊とは言えども殺す事には躊躇いを隠せなかつた。
「何だ？早くしろ」

彼女は深くため息をついた。

そして、眩い光は彼を締め付けるかのように細い糸となつた。

キンツ

電波のような音が響いた。

「・・・」

彼は頭を手で押さえた。頭に音が響く。
高い超音波が鳴り続ける。

その時に彼の中の精霊が封印された。

同時に彼の記憶も封印された。

今、彼はただの人形になった。

* * *

・・・? 「ここは何処?

桜色の髪の少女は診察台から起き上がった。

その少女に気付いたように、周りに白衣を着た女性が近づいた。

「華人：実験成功です」

周りに明るい雰囲気が漂つ。

その雰囲気に戸惑いを隠せない少女が呟いた。

「ここは何処?」

しかし、彼女の声に答える者は居なかつた。

少女は様々な訓練を受けた。

華人としての力を試された。

彼女は実験台だつた。

少女は時が過ぎても、少女のままだった。

年を取らずに生きていく。

半永久的に。

華人はなびとといつ言葉が世界に広まつた頃。

桜色の髪の少女は、自分の記憶を取り戻してきていた。しかし、誰にも話さずに心に留めていただけだつた。話したら、また再検査をさせられると思ったからである。

日常のように診察を受けた後、少女はいつものように窓を眺めていた。

窓の向こうには桜が咲いている。
いつもどおり景色。

1年中咲く桜。人工的に作つた桜だからだ。しかし、今日はいつもと違つ景色が映つた。蒼い綺麗な髪、さらさらと風に靡いている。歌が聞こえる。

これは華人の歌だ。

今、華人は宗教化して、世界各地で歌われている。

「綺麗な声・・・」

少女は初めて心動かされた。

綺麗で、純粹な声に。

初めて少女は、彼女自身の意志で動き始めた。

28・華人の想い（後書き）

読んで下さつてありがとうございます！

彼視点少ない！出番少ない・・・。

今回は華人として生きている頃の音憂ちゃんです。

少しずつ音憂の頃の記憶を取り戻しています。

人の心が分かる花と音憂ちゃんを混合させた種族が華人なので、華人は人の心を読む事ができます。

そして、音憂ちゃんは永遠の少女です！

年をとらない設定です！

後、華人の実験はまだ音憂ちゃんしか成功されていません。

歌を聴いて心動かされる音憂ちゃん。

蒼い髪で、歌が上手いといえば・・・？

次回も宜しければ見てください。＾＾

29・藍色の音

綺麗な声・・・誰だろ？。

音憂はベットから起き上がり、窓を覗き込んだ。
外からは蒼い空が浮かび上がっている。

音憂は裸足で窓に足をかけた。

ズルズルズルツ！

窓からすべり落ちてしまった。しかし、こじは1階なのでそれほど怪我はしないと思われるが・・・。

見事にぺたんとつぶれている音憂をまじまじと見つめる少女。

「大丈夫？」

綺麗で澄んだ声だった。

音憂は顔を上げて、少女の顔を覗きこんだ。
さらさらの蒼い髪が風に揺れる。

「美人さん・・・」

音憂は思わず心の声が出てしまった。

「えつ・・・そんな事ないわよ」

少女の頬が少し赤みを増した。照れながら、少女は音憂に手を伸ばした。

「起き上がる？」

こくんと音憂は頷いた。

窓の外、辺りには芝生が広がっている。せりせりとした草の上に、

2人は立つた。

「あなたは、窓から出てきたみたいだけど・・・
少し気まずそうに、藍依は呟いた。

そんな藍依をじっと見て、平然と答えた。

「うん、私実験台なの」

藍依は、はつとしたりよつて田を見開くと、切なさをひで音憂を見た。

「実験台・・・そう」

藍依は田を落とした。

「歌・・・」

ぼそつと音憂は呟いた。

「聴かせて？」

突然のリクエストに困る藍依。

嬉しいけど・・・。ここは研究所よ・・・。あなたここからまた

捕まっちゃうんじゃない？

ふいに音憂の腕に目がいった。

酷い傷・・・。実験台つてこついう事なんだ・・・。

「ここじやあ、駄目つー私について来て」

高らかに藍依は叫んだ。

思い切り走る藍依に必死について行こうとする音憂。
傷だらけの足を引きずつて、走り出した。

「ここなら聴かてくれるの？」

2人は広場のベンチに腰をかけた。

藍依は肩で息をしている。なぜなら、50㍍走のよつて想いつき
り走ったからだ。

だが・・・

「すじい、ね」

音憂は平然としていた。まったく呼吸が乱れていない。

何者なの・・・この子。

「別にすじくないと思つ、普通、正常

機械のように喋る、音憂を見て藍依は思つた。

実験台・・・という事は。

もしかすると、この子が・・・?

「あなた、もしかしたら華人？」

恐る恐る聞いてみた。

「うん」

「・・・」

思わず息を呑んでしまった。想像していた華人の姿とは違つたからである。

叫びたい衝動を我慢して、藍依は口をぱくぱくさせた。

「お願いします！華人様！」

藍依はベンチの上で土下座をした。

「？」

眉を寄せて、不思議がる音憂。

「私のママを助けてくださいー！」

突然の頼み」とから始まつた、音憂のミッシン
「私のママは研究所で働いているの、けどね本当はこんなところにいたくないんだよ！ママは連れて行かれたのーここに・・・つ

半泣きの藍依を見て、音憂はふうと息をついた。

「分かった、助ける」

音憂はベンチから立ち上がつた。ぐるっと振り返つて藍依を見つめる。

「いつてくる」

「・・・あ

音憂は目をキッと開いて研究所の方へ走り出した。

余計な詮索はしない。これが音憂のポリシー。

藍依は流れる涙を拭いて、咳いた。

「ありがとう華人様・・・っ

窓からさつと侵入する音憂。かるやかな足取りで部屋に侵入する。

周りは騒がしい。

「何が起こつたやう」

あなたがここから抜け出したからでしょう。

「華人！ここにいたのか」

さつそく見つかりました。たしかにあります。

卷之三

۲۱۰

普通にスルーした。

はい！もちろん追いかけてきました

「待てえ！華人！」

(待てと言われて待つ奴がいるのだろうか・・・)

ふうとため息をつく。

そして足を止めた。

えっ！本気で待つつも

「ようし！ 捕まえた」

あ、ひ、ひ、
じ、う、か、る、の、で、しょ、う。

「フライング」

後ろから抱き付こうとする相手の腹に、肘で思いつきり衝撃を与

えた！

(ぐつはあー！ しかし逃がすものかあ！)

音憂の肩を掴もうとする。

ば
ち
ん

はじかれた
8

「今までずっと一緒にいたじゃないか……」

いやいや、ずつとじゃないだろう。

音憂はその声にまた足を止めたッ！

これはもしや、感動の場面！？

「覚えてない」

ひゅるる〜。寒い北風が吹いた。
(部屋の中なのに!?)

たらじらじら～（絶望の曲を各自想像して下さい）

「いた」

358個目（？）の扉をぶつ壊した。どれだけ扉が多いんだこの研究所は・・・。

そしてどれだけぶつ壊しているんだ・・・。破壊神に相応しい。目の前には、蒼い髪の女性がいた。

「華人！どうしたのですか？」

震える声で話しかけた。

「過去透視、する」

キイイイン！

歯医者のような嫌な音が響いた！（嫌な音だ！）

音憂の頭の中には動画が流れた。あまり映りはよくないが・・・。

その動画の中には、蒼い髪の小さな女の子がいた。

（この）は、あの子

ふつと田を開じた。

「あなたが、ママだ

「？」

女性をお姫様抱っこして、連れ去った。

ミッションコンプリート

「つれてきた」

藍依の母をベンチに座らせた。

「・・・藍依」

「ママ」

ひしつ！感動場面、親子の再会。

「めでたし、めでたし」

勝手にオチをつけ、うんうんと頷く音憂。

すたすたすた…。

音憂は何も言わずに去つていった。切り替え早ツ！

「わあ！駄田ですよ！華人様」

藍依が呼び止めた。

「？」

「ぜひ、家に泊まつて下りてよ、ママ？」

「そうね、お詫びお礼をしたいわ」

音憂は無言のまま立ち去つた。

「歌聽ける？」

藍依は満面の笑みをうかべた。

「もうひさですっ！」

これが音憂と藍依の再開のお話でした。ひさひさん

29・藍色の音（後書き）

読んでくださいありがとうございました！

今回は少し「メーティーな感じで進めてみました。

最近暗かつたので・・・。

とりあえずここから、彼に出来つまでを書き進めたいと思います。
たんたんとしてこの音憂ちゃんです。

実の所、抜け出ようとすればいつでも音憂ちゃんは研究所から抜け
出せたのでした。

音憂ちゃんはまだ記憶を思い出していないません。
どのタイミングで、思い出すのでしょうか？
宜しければ、次回も読んでください。^ ^

30・探しモノ・旅の行方

私は歩く、大切なものが見つかるまで。
幸せな何かが、確かにあつたはずだから。
探し続ける、手がかりがなくても。

霧の向こうに、きっと何かがあると信じて。

私は歩き続ける。

音憂は研究所を抜け出し、藍依の家に居候させてもらっていた。
藍依の母は研究所で働くかされていたが、音憂の力によつて強奪
(?)してきたのだつた。

「もうそんな道には歩みません…『ごめんなさい華人様』

と心に決めた藍依の母は、今は違う仕事を探し働いている。

藍依の父は随分前に亡くなつており、藍依の母が研究所で働く前
までは2人で暮らしていた。

研究所に監禁されていると言つて良いほど、藍依の母は働くされ
ていた。

華人が助けにくるまで、藍依はずつと一人で暮らしていたのだ。
独りで、孤独に暮らしていたに違いない。

しかし今は急展開な幸せが藍依に舞い込んでいた。
昔の寂しさを埋めるように・・・。

研究所の連中に気づかれぬよう遠くの村に引越しをして、の
どかに暮らしている。

研究所の奴らは重要な逸材（華人）や能力優秀な部下（藍依の母）

を失い、大騒ぎになつてゐる事だらう。

だから、何としても取り戻そうとしてくるに違いない。

そんな不安も抱えながらも、自然の多いこの村 フエリス で暮らしていた。

暖かい日差しが降り注ぐこの大地で、村の森に囲まれながら3人は小さな家に住んでいた。

たつたつた！

「華人様っ！あの、どちらに行かれるのですか？」

藍依は玄関まで走つて來た。音憂が何も話さずに出かけようとしているから心配になつたのだ。

そんな藍依を見つめ迷惑そうな顔をする華人。

靴を履きながら目を逸らして言つた。

「探し物があるんだ」

意味深な言葉に藍依は首を傾げる。

「私もついていいでしようか？」

恩人の華人に、ずっと忠誠を誓おうと藍依は決めていた。

忠誠は心の中で決めていたが、華人が知つたら迷惑がるだらう。

「長い長い旅だ。そんな簡単なものじゃないんだ」

華人の背中を見ながら、藍依は肩を落とす。

「もう帰つて来ないという事なのですね」

悲しそうに藍依は呟いた。

言いにくそうに、華人はため息まじりに答えた。

「……そうなるな」

その言葉に藍依は動搖を隠せない。

藍依はやつと掴む事ができた幸せが、崩れていくような恐怖を感じていた。

手足が震えて、涙が滲む。

「藍依のママと幸せにな」

華人は精一杯の笑顔で別れを告げた。きっと彼女もどこかで寂し

さを抱えていいるだらう。

しかし揺るぐことのない決心。

扉が開かれ、一步一歩踏みしめるように歩いた。

淡々と歩く華人。

どこに向かうのか分からぬ。どこに行きたいのかも分からぬ。

「分からない事だらけだ……私は」

足の疲れが少しずつ溜まっていく。しかし、そんな事は気にしないかのように歩き続ける。

長い長い獣道を歩いて、ようやく着いた初めての街。

建物に溢れかえつて、人が賑わっている。

初めて・・・初めての筈なのに。

見覚えがある?

音憂の口が勝手に動き出した。

「ここは、ぶどう酒で有名な街、シャワール。陽気な人達が多くて治安は良い。音楽好きな人が多く、楽器職人がここで勉強しにくる場所。そもそも木管楽器の材料に使うヴェルアという樹が多く生息して入手が比較的容易なので、楽器職人が集まる理由と言われる…」

…

誰?誰が教えてくれたのだろう。私は元々知っていたのか?それなら他の知識も知っている筈だ。

何故だ。何で懐かしいなんて思つていてる自分がいるんだ。私はずっとあの研究所で暮らしていた。

いや、そうか私の記憶だ。それ以前の記憶もあつたんだ。つまり、ここは私の記憶に関係している場所・・・。

ぐるぐると思考が巡る。それと同時に体が動いていた。
どこかに誰かがいたという確信をしていた。

街中を全速力で駆け巡り、迷わずに進んでいく。

人とぶつかりそうになるところをすれすれにかわす。
人込みに呑まれそうになりながらも、必死に向かっていく。

ここを右に曲がって、突き当たりを左に・・・。
そう、その時は隣にあつたんだ、大切な何がが。
私はそれを探したい。手放したくないんだ。
思い出したい、私の大切な何かを。

お店だ。お店に来たんだ。

何かを買う為？・・・いや違う。でも何か大切なモノを手に入れ
たんだ。

何だ、それは。

小さくて、可愛くて、輝きに満ちているモノ・・・。
ここの大好きなお店だつたはず。

小さなわき道を通り、たどり着く。
思い出の場所に。

たん・・・・つ

走り続けた足を止めた。

疲れて、呼吸が乱れる。目の前がかすんでゆがむ・・・。
酸素が不足しているせいか荒い息をする。倒れそつな程、目眩が
するが、重たい頭を上げる。

ここに何かが手掛かりがある筈だから・・・。

期待と高揚感で胸が高鳴る。

ゆっくりと顔を上げた。

「・・・・・」

目の前の景色に呆然とする。

体が硬直し、思わず息を呑んだ。

確かにここにあつたはずの大きくてお洒落なお店。今はもう、ガラクタみたいに壊れかけていた。

今はもう前のような店の明るい光は消え失せている。静まり返った場所。何かが終わった場所。絶望の終焉。

「……つぶれてしまっていたのか」

急に力が抜けて、頭から前に斜めつて倒れた。ゆっくり、ゆっくりと。力尽きていく・・・。

ドスン・・・

重たい音が響く。

最後の支えを失ったとき、人はどうなるのだろう。

寒い気温の中、しんしんと雪が降り始めた。

小さく白い雪。涙みたいに、冷たく悲しい雪。

少女を慰めるかのように少女を雪が覆う。

熱を奪い、天に連れて行こうとしているのだろうか。

支えがないのなら、倒れるしかない。

自分で立てる力が無いのなら。

またいつか、起き上がることを祈つて。

願い続けるしかない。

冷たい世界で、少女はゆっくり瞳を閉じた。

30・探しモノ・旅の行方（後書き）

読んでくださいありがとうございました！

音憂ちゃん！大丈夫か！？おーい！

これはピンチです。

誰かが、音憂ちゃんの支えになってくれるのでしょうか・・・？
藍依ちゃんはお母さんと一緒に暮らすことを見ていたから、
ここには来ないのでしょうか。

・・・かといって彼はきっと研究所で袋叩きにされてくるでしょう
し（笑）殺されてもおかしくないしなあ・・・彼はどうなっている
のでしょうか。

そんな感じの内容をお送りします。^ ^

次回も宜しければ読んでみてください！

終話・永遠の命

意識が崩れていく中で、歌だけが聴こえて来た。
優しい歌声、雪も溶かしてしまいそうな……歌。

心も冷え切った先には、何も残っていないんだ。
ある筈と思っていた大切な物も、失っていた。
もう、無いんだ。

いくら探してもある訳がない。
だって……この世界には存在しないのだから。

大切な人、獅樹君。

思い出したよ、キミの事。

ずっと守つてあげたかった人、精霊になつた君。

キミ一人から、2人も大事な人を失つてしまつたね。
心がぽっかり空いたみたいなんだよ。

精霊くんは研究所に来て、私を助けてくれたんだね……ありがと
う。

でも、それでキミを失う事はもつと辛かつたよ。
体を傷つけられた時より、痛いよ。傷……深いんだよ。

さよなら精霊くん。

そして又、新しいキミが生まれるんだね。
何も無い、記憶の無いキミが。

それでも私はキミに死くしたい。幸せになつて欲しい。

もうワガママになつていい、私。

止められない、命果てるまでキミの為に生きてくよ。

また会おう、キミに。

「華人様っ！」

寒い空気を遮るように高い声が響いた。

華人の瞳に映るのは、蒼い綺麗な髪・・・藍依だった。

「何で、ここに……？」

かすれた声を華人は出した。

本当なら、藍依の母と2人で村に住んでいた筈だ。
ずっと夢だった、家族と平和に暮らせる時間。藍依はずっと憧れていた・・・。

華人の問いに藍依はにこっと微笑みを浮かべた。

「あなたに忠誠を誓うと決めたのです。だから私は、あなたにどこまでもついていきます」

雪が2人を包む。

涙を浮かべる華人を、藍依が抱きしめる。

何もかも失つていた事に気付いた音憂には、藍依は大切な支えだった。

藍依は支えた。折れそうな華の茎を。
やがて華は綺麗に咲き誇るだろう。

幸せな結末にさせるために。

温かい部屋、ほんわりと2人を包む。

街で宿屋を探し、そこに泊まつた。

小さな部屋で、2人は抱きしめあいながら布団にへるまつた。

音憂は心の秘密を藍依に打ち明けた。

自分が特殊な能力を使えること、音憂として生きていた時の事を。藍依は頷きながら耳を傾け、自分より小さな体が想像以上の重い困難にあつていた事を知つた。

「音憂様……もう大丈夫ですよ。藍依がずっと一緒にいますから」

体から振り絞るような声で、話しかけた。

音憂は、その言葉を聞きゆっくり頷いた。

そして、藍依の顔をじっと見つめて

「藍ちゃんって呼んでも良い？」と言つた。

藍依は「もちろんです！」と言つて嬉しそうに、ほしゃいだ。

絆は深まる。

この2人の間で、ずっと続いていつた硬い絆……離れる事の無い想い。

しかし、この絆が音憂の心を屈折させていった。

ずっとキミの傍に居たかった。

キミが私を忘れていても……。それでも良かつた。
でも本当に……良いの？

私より、藍ちゃんの方がキミの傍に居たほうが良いのかもしけない。

だつて私の所為でキミは苦しんでいたから……。

私もキミだけに恩くすつて、馬鹿みたいだよね。

異常だよ、私……。ただキミに寄生している害虫みたいだ。

そうだよね、私だけじゃないんだ。

キミと歩んでいく人は……。

ガタツ・・・ドゴンツ！

扉が壊れる音が響いた。

そして今、中央をくり抜かれた壁がある。

「よし……と」

何が『よし』なのかは置いといて。

蒼く長い髪の女性がするりとぼろぼろの壁の中を潜り抜けた。

「ここにいるでしょ！少年！」

体育系な教師のような声が響いた。

その声の持ち主はズバリ藍依の母だった！

そう、ここは研究所。嘗て藍依の母が働いていた場所。

「あなたの事は悪い事したと思つていたのよ。今回助けてあげるから許して」

悪戯っぽい表情を浮かべながら、少年のあちらこちらに巻かれている鎖を外す。

ボキヤ！ジャララッ！

ちなみに今は魔法不使用で、素手で行われています
つまり、藍依の母は怪力です。要注意人物ですね。

「おーい少年！起きて……って魔法かけられてるのか。しちょうがないなあ……」

ズドオオン！

睡眠解除魔法をかけるのかと思つていたら今、柔道技かけましたね。

どこで習つたのでしょうか。

「ニニニ～」

彼は寝ていますね、さすが。

記憶を失つてしまつた時から彼は変人だったのですね。

ジリリリリリイイイイ！

警報が鳴り響いた！今の音で侵入者がいると気付いたらしい。ま
あ当たり前です。

「あっちゃん……」

藍依の母、困つており、くるくると思考を巡らせます。

すると、自分のサイフを彼のポケットに忍び込ませました！
ちなみに大金が入つているサイフです。

彼もお金は持つていたのですが、修行の時に使つていたと思われる異国の通貨が入つております。

でも、サイフを入れてどうするのでしょうか？

「いちかばちかッ！」

バシコツッ！

彼を、何処かへぶつ飛ばしました！

テレポート魔法です、上級魔法！

さすがは藍依の母！研究所に雇われただけある・・・つてあいつどこいったあああ！

「彼が飛ばされた場所が、この世界でありますよ！」……
ええええええ！しかも他の惑星の場合あるんですか！？

「お前！何者だ！」

ようやく敵もこここの場所に辿りついたようですが！

「じゃ、私も退散します」

シコンツッ

いひやつて彼は飛ばされたのであつた・・・。

キミの事は全て分かる。

私には「えられた力があるから。

私は全ての力を使い、彼と藍依ちゃんが結ばれるよつじた。
時には、心を惑わせる力を使いながら。

結果オーライだよね。

2人は幸せになった……よね？

少女は大きな樹にもたれかかる様に座っていた。その樹の周りには一面に芝生が広がっており、蝶が飛び交っていた。その場所は、天国のように優しい光が満ちていた。

樹には綺麗な花が咲き乱れており、空は透明な青だった。

「もう、ここまで記憶だけでいいの？」

昔の記憶は鳴り止んだ。はっきり言つと昔を思い出す事はどうでも辛い、これが死者への罰なのだろうけど。

私は振り返つて、何かを見た。

すると予想通り、1つの存在がそこに居た。

どこかで見た事のある姿だと思い、目を凝らす。

「お前は後悔していないのか？」

今更、何でそんな質問するのだろう。暗い影のよつな、輝く光のよつな何だかよく分からぬ存在だった。

「もちろんです。この結末は、私自信よく考えて出したしました」

はつきりと私は答えた。

「どうか、それなら構わない。やり直す事ができても、お前はこの結末を選ぶのだな」

その存在の言葉は、私を諭すように優しく響いた。

やり直す事ができたら、私は又この結末を選べる……？

「……」

泣きたくなつて、言葉が出なかつた。

今でもこの結果が最善なんて、自信もない。

もつと違う道があつたのかもしれないって、昔の私を見て思つた。もつとこうしたらつて、もつとこうできたらつて、数え切れない程浮かんでくる。

溢れる、涙。

それは後悔からの涙。

「分かりません……でも、やっぱりキリがないと思うんです」
私は照れくさくて、恥ずかしくなった。

でも、その存在は理解してくれたように笑つた。

「どうか、やっぱりまだ後悔してるのか」

意味深な言葉。まだって……？

「私、もしかして……何度もやり直してるの？」

音憂としての人生を……繰り返していた？

「君が求める限り何度もやり直そう。そして、いつでも君に力を『与えよ』」

あなたは、私に力を『与えてくれた、あの人……ですか？

「そうだよ、音憂」

あなたは、お父様なのですか？

「私は、『この世界に生まれる全ての魂の父親』といつても良いかもしねないな」

えへへ……っ。それじゃあ、あなたは神様ですね。

「それは分からないな？」

とぼけるのも上手ですね……。

神様は私にチャンスをくれた。何度も何度も。

でも、生きている時は忘れているから、守られている事を忘れて

しまつ。

でも心配しなくていいんだよね、生きる事に。法^ルなくて良いんだよね……。

だから堂々と生きていいこいつ。私らしい生き方を探して。

後戻りも、先に進む事も私達はできる、精神の成長段階によつて。

何度も繰り返して、学んでいいこいつ。

この世界で、いつまでも……。

ねえ、聴こえるかな……？

本当はね、2人を見て羨ましいって思つたんだ。
そして痛くて、悲しくて、寂しい思いもした。

もつと生きれば良かつたな……って後悔しちゃつた。

でも私は笑うんだ。

2人に出会つたのがとても幸せだったから。
泣かないって決めたんだよ。

悲しみと寂しさは涙にせずに心の底へ。

あなたが今幸せなら、それが私の幸せになるから。

私は今日も笑顔になれるのです。

終話・永遠の命（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

ついに完結致しました。

ぐだぐだな文で真に申し訳ありませんでした。

読んで頂けた読者様には感謝の嵐（？）です……。

音憂ひやんが最後に出した結論は、作者がこんな世界だったからい
なと思う希望です。

もし这么のような世界だったなら、躊躇わず、迷わずに自分の思つ最善
の生き方に、全力を尽くせる気がするからです。

何よりもお話にもなつていらない話なのですが、『華の天使 月の精靈』
番外編を2作書こうと思います。
藍依編と音憂編です。

何度もやつ直せるなら、こんな結末もあつた話とこつお話です。

小さな村に2人は住んでいた。

大きな森に囲まれた小さな村。今、2人は村の脇にある、少し傾斜がある坂道を上っている。

鳥が鳴く声しか聞こえない静かな森の中。

耳を澄ますと森が風に揺れる音が聞こえる。

平和な時の中をゆっくりと過ごしている青年と少女。

青年は鶴の羽のような黒い髪で、端正な顔立ちをしている。

物腰が柔らかなのに、どこか棘のような強さを隠し持つてゐるよう

に見える。

その青年の隣に居るのは、蒼い髪の少女。さらりとした髪を風に靡かせている。

少女は隣に彼が居る事に、溢れるばかりの幸せをかみしめている。風がさつと吹き渡る森の小道を2人は散歩していた。

「……梓月は幸せ？」

急に声色を変え、ふと切なげな表情を浮かべる少女。

その言葉に疑問を浮かべ、少女の髪をじっと見つめた。

「あ？ 何でそんな事言うんだよ」

照れくさそうに、困った顔で言つた。

「だつて、梓月ぼーっとしてるから……私の話しつまらないかな
つて」

心の不安が増殖していく気がして、思いを打ち明けた少女 藍依。

自分と居てつまらないのかと不安で堪らない。

「つまんない訳ねえーって……可憐い藍依ちゃんと一緒に入れて幸せだつて」

少し冗談まじりに慰めるような口調で言う彼 梓月。そして、藍依の小さな肩にぎゅっと後ろから抱きしめた。

「……」

梓月は不思議に思った。

いつもなら抱きしめると固まる藍依が、今は特に反応が無い。

「あの子の事忘れられないの……？」

その言葉は彼の心に、ぴしっと亀裂が入ったようだった。藍依に掛けた腕を、片方ずつ離した。

「……」

俺つて分かり易いのか……？

そうだ、藍依の言う通り何か不落ちない事があるんだ。何度も夢に出る、アイツ。

見覚えのある少女。

ずっと傍に居てくれた気がしてならない。

藍依もそんな感じの少女と一緒に居た気がすると言っていた。俺達と何か関わりのある少女。

その少女が何度も夢に、現れる。

桜色の大きな花が、あちらこちらに咲き乱れる場所に俺は居る。前にはあの少女が居て、肩までの桜色の髪を揺らしながら歩いている。

後ろには藍依が待つていて、前に進んで行く少女を眺める俺。どうしてもそっちに気を取られ、食い付くように見入ってしまう。俺は追いかける。……藍依を置いて。少女の肩に触れようと手を近づける。でも感触が無い、つまり触れない。

でもそんな俺に気がついて、くるりと振り迎えり、にこっと頬を染めながら笑う少女。

『藍ちゃんと、お幸せに……』

その少女が忘れられない、今でも。

でも、確かに想いがある……それは、藍依を大切に思う気持ち。一見筋が通つてないよう思えるけど、俺の中では藍依への気持ちが断然占めている。

藍依ってすっげー可愛いんだ。

出会った時は冷たそうな印象に、少し近寄りがたかった。けど、すぐに分かつた。

藍依は人と接するのが苦手なだけだって事に。

だから俺、藍依の事を笑わせようと色々した。

すっげーつまんねえ事でも笑ってくれるんだよな、藍依って。つーか、多分普通の奴と同じのツボが違うな。変な所で笑うしな、

藍依は。

優しい奴なんだ……藍依は。

それですっげー友達想いで……。

あ？ 友達？

あいつに友達なんて居たか？

……まあ、いつか。その友達をすっげー尊敬しててさ、何があつても守つて行く！ って所が格好良いんだよなあ！ これはギャップで、すっげー俺的にヒットしたな。うん、可愛い。藍依は、すっげー可愛い。

よし、俺の心の整理、終了！

「俺が好きなのは藍依だから」

藍依の背中に向けて、彼は話しかけた。

彼は照れる様子も無く、大きな声で言つた。

その言葉を聞いて、藍依はふるふると震えだし、振り返つた。

「安心して……良いの？」

柔らかい涙。

彼を想い、流す涙。

そんな藍依を見て、想いが溢れる彼。

自分の為に泣いてくれる。

一緒に居ないと寂しいって言つて、一つ一つの態度に、心が離れて行つてないかと悩んでくれる。

全て、自分を愛してくれている証拠。

「ああ！ 死ぬまで安心していいぞ！ 約束だ」

俺達は約束した。

藍依がこれで安心してくれるなら、どんな約束でもするから。本当に藍依が大切だからさ。

又、数日後に夢を見た。

……そつか、アイツは俺達の恋の天使だつたんじやないのか。

華に埋もれる天使に出会つた。

よく顔をみると、やっぱり綺麗で可愛らしかつた。

「夢で会つたびに、君を見ていた」

俺は、心の……ずっと^{わだかま}蟠つていた想いを打ち明けた。
決別の意味も含めて。

俺の言葉に特に反応せずに、彼女は周囲に咲き乱れる華を見つめていた。

「墮ちたの……失ったの」

ぼそぼそと彼女は話し掛けた、いや話すと言つよつ自分に語りかけたという表現の方が近いだろう。

「何を……失つたんですか？」

変に敬語を使つてしまつ。

緊張の所為か、喉が渴いて言葉にならない。

「翼……私の大事な片翼。やがて私は墮ちる、この深い海へ」

彼女はそう言って、下を指差した。
確かにそこには、蒼い海があつた。墮ちたら、もうここへは戻れないだろう。

「君は天使だ。そして綺麗な華のように、惹き付けられる魅力がある」

「華……天使？」

「ああ、華の天使だ。だから飛べるよ、君は」

「飛べない……私はもう」

「君は誇り高い『華』だから。僕の憧れだったから、下を見ないで……空を見上げて欲しかった」

俺は夢の中だからか、支離滅裂な言葉を口にしていた。

彼女の事を何でも知つてゐるような、そんな言葉^{セリフ}が次々に浮かぶ。

「遠い遠い、綺麗な蒼い空にキミの手指すものが絶対あるから…

「…」

俺は、上に広がる蒼い空を指差した。

彼女は飛べる、未知が広がるこの世界に。

彼女は手を差し伸べた。彼女から手を差し伸べるのは夢の中で、初めてだった。

でも、それはできない。

確かに応援したい、彼女を。

俺は、君と一緒に飛べない。

……できない、俺には……藍依がいるから。

俺は首を振った。

そして彼女は悲しげに、差し伸べた手を下ろした。

「……………、違うよ。キミだけ…………君だけがいればいいの」

外編・蒼い月（後書き）

お読み下さりてありがとうございます！

今回は藍依ちゃん編です。

今までの展開なら、このように終わっていたというお話です。

最後のセリフに聞き覚えのある方がいたら、感激です！実は、1話の最初で使った言葉です。

華の天使は独りでも飛び立つ事は出来るでしょう。
海に溺れないで頑張れ、音憂ちゃん。

俺は、上に広がる蒼い空を指差した。
彼女は飛べる、未知が広がるこの世界に。
綺麗に空に舞うだろう、華のように。

天使は、恐る恐る手を差し伸べた。
彼女から手を差し伸べるのは、初めてだった。
手が微かに震えている。俺に手をはじかれないかと不安なのだろうか。

でも、俺が手を差し伸ばすという事は……。
様々な思考が頭を駆け巡る。
湧き上がる感情を理性が抑えようとする。
いつもやうだ。

俺はいつも頭で行動しようとする。
感情を抑圧させて……忘れたフリして。
何もかも中途半端なんだ。

パシソッ

俺は天使の手を掴んだ。もう、何もかも抑えきれなかつた。

「え……どうして」

少女は戸惑いながら、俺を見つめた。
俺も、じつと少女を見つめた。あどけない表情、綺麗な瞳。

彼女との記憶が頭の中過ぎた。

ずっと一緒に居てくれた、大切な存在。笑顔に何度救われただろう。

キミをずっと守っていきたいと思つたんだ。

「うあ、獅樹くんっ！ おはよー」

元氣で明るくて、眩しくて。俺にとっての光だった。

どんな俺でも支えてくれていた、女の子。

俺がいくら憎んでも、許して愛してくれた。

「精霊君……私はずっとキミの味方だよ」

ずっと俺だけを見て、俺の幸せだけを考えてくれていた。

俺が何度も君を忘れてしまっても、笑顔で会いに来てくれた。精霊化している俺でも、差別せずに俺自信を見てくれていた。

2つの存在は同一。

空になつた俺に惜しみなく振り注いでくれた。

キミがいたから、今の俺がいるんだ。

「音憂……もうお前を放さないから。ずっと待たせてゴメン……」

俺は彼女を抱きしめた。音憂の体温が俺にも伝わる。音憂の温もりを感じる。鼓動も聞こえそうなくらい、ぴったりと体がくつ付いている。

これが音憂なんだ。
やつと会えた、俺と音憂。

惑わされずに進む、この感情。

音憂は安心したのか、俺の胸に頭を埋めた。どっしりと胸に重さが掛かる。

桜色の髪が俺の頬に当たる。花の良い香りがした。
何か妙に音憂が愛しくて、体中の熱が湧き上がった。

「……もう、飛ばなくて良いの？ 飛ばなかつたら、もう……華の天使じゃなくなつてしまふ」

彼女は泣いていた。

天使のままでいたい気持ちと、飛びたくない気持ちが混ざつて、何をしたら良いかが分からなくなつてしまつているのだろう。

何でそんなに天使でいたいんだよ。
無理してまで、飛ぼうとすんだよ。

「俺がお前を『華の天使』って言つたからか？」

俺は囁くように耳元で言つた。
すると音憂はこくりと頷いた。

「キミが私に付けたくれた名前だから、大切な名前だから。私、天使でいたいって思つた。キミが綺麗つて言ってくれてから……私がまだ飛んでいたいの、天使でいたいの……！」

……馬鹿。

なんだよ、そんな事まだ気にしてんのかよ。
そんなの俺が、勝手に決めた呼び名なだけであつてさ。

……俺の戯言、覚えてたのかよ。

華の天使になりたいって思つてたのかよ。

俺が憧れてたって言つたからか……？

田についたのは、ぼろぼろになつた彼女の翼。

……もう、休めよ。

悪かつたよ、勝手に「お前には」の世界を飛び回る可能性がある

って言つて。

人事つて思つてたんだ。

だから頑張れつていつたのかもしれない。

それに、折れた翼で無理に飛んだら、墜ちるだろ。

俺は下を見た。

深い深い闇に似た海がそこに存在していた。

そこに墜ちる可能性もあるのに、飛び立つ勇気がよくあるな……。
見るだけで足が竦む。

出合つた時、音憂は俺に手を差し伸べた。

それは、俺と一緒になら飛べると思つたからだつたのか？

俺といたら、頑張れると思つたからなのか。

勝手に自惚れてしまう。

でもそんな事恥ずくて、本人に聞けない。

だから俺が言つ。

彼女が少しでも安心できるのなら。

「お前は天使じゃないから、飛ばなくていいんだ」

震える肩を強く抱き寄せた。

もう、逃がさない、放さない。

「俺の華だ。だから一緒に居てくれ、俺の傍に」

捕らえるように音憂の瞳を見つめる。

彼女は一瞬戸惑つてから、笑つて、頷いた。

音憂の頬を流れ落ちる涙を、俺は指で拭つた。
そして背中をとんとんと叩く。

「ホント泣き虫だな、音憂は

俺の声に反応するかのように、顔を見上げた。
そして探るように、俺を睨んだ。
な、なんだよ……。

「君は、獅樹君？ 精霊君？ 梓月君？」

急かすように聞いてくる。

体を揺らしながら、俺の事も揺らしていく。

ぐらんぐらん……

そんな強く揺すんなよ、興奮しそぎだろ……。

「誰だつたら良いんだよ？」

俺はちよつとむつとしたように答えた。

だつて、俺がどいつか分かつたら嫌いになつたりすんのかつて。
音憂は誰が好きなんだよ……。

「みんな好きだよ」

音憂は満面の笑みで答えた。

……つづーか心ん中読むなつて！

誰が好きつたつてま、どれも俺なんだけど。

「キミつて月みたいだね」

音憂がここにこしながら言つてきた。
は？ 用ですか。

まあ、俺、月の精霊に取り憑かれた時もあるけどな。
結局音憂が直してくれたんだけど、ふつーの人間に。

「月が満ち欠けすると、同じ月とは思えない程変化するよね？
キミも別人みたいに性格が変わるから、月みたい！」

きやきやつと面白そつと笑つてゐる。

俺が多重人格な訳じゃなくて、精霊化の影響で記憶がちょくちょく無くなつてゐるだけだし。

性格変わつても仕方なくね？

音憂は良いだとえが出来たと思つて満足そつだった。
ま、音憂が幸せそうだからいいとすつか。

「音憂、俺となら何でも頑張れるか？」

「へ？ ビうしたの急に……」

「いいから答えろつて」

「うん。頑張れるよ、何だつて。キミが居るなら

マジに言われると照れる。

「なら、飛ばなくて良いじゃん」

「え？」

「お前、そんな翼じゃ飛べないだろ？ それに俺には翼は無い、お前に頼つてしか空に行けないんだ。そんなん嫌だかんな」

「……」

「なら海に行こう」

「え……！ それは」

「大丈夫だろ、俺が居るなら」

「…………うん、うん。一緒に、ずっと一緒に？」

覗きこむように俺を見る。

「ああ、一緒だ。ずっと」

海の上に俺達は居た。

俺達が立っている場所は薄い霧。雲といつて良い場所だ。時は経ち、やがて雲は破れる。人が死を迎えるようになる。

「ここだったら、死を恐れて一生過ごす事になる。そんなのつまんねえじゃん。だったら海に行こう。海で泳いだら、いつか島が見つかって、安心して過ごせる場所もあるかもしねりないだろ？」

「……怖いけど、大丈夫。キミが居るなら」

涙目で必死の笑顔を作ってくれた。

そんな音憂を抱き寄せる。

背中をとんとんと叩く。

「お前ホント泣き虫だな。……でもすっげー頑張り屋だよな」

震える肩をぎゅっと抱き寄せて、「大丈夫だよ」と呟いた。

音憂を抱いて、足元の雲から飛び降りた。

少しずつ海に近づく。

真っ黒な闇に似た海。

もう、恐れない。音憂がいるなら頑張れるから、俺。

だから俺の傍に居てくれ。

それだけで充分なんだ。

安心して過ぐせる俺達の居場所を探しに行こう。

ゆづくつと墜ちて、海が近づく。
深い深い闇に。

俺達の旅は始まる。

俺達は闇とこのやがての海にて、足をつけた。

読んで下さつてありがとうございました！

ここまで書いてこれたのは、読者様が居て下さったからです。こんな話ですが、読んで下さつて心から感謝しています。

最後は夢のような話で終わりになりました。

こちらは音憂ちゃんエンドです。

海の向こうになにがあるのかは分かりません。
大地があるかもしれませんし、闇みたいな海で、吸い込まれてしまうかもしれません。

それでも、誰かと一緒に恐れずに進んで行く事できるのではない
かと思います。（そんな勇気があれば素敵だなと）

このお話は、夢の世界での物語です。

それは、彼と音憂ちゃんが一緒に見ている夢かもしれませんし、音
憂ちゃんが一人で見ている夢（只の空想）なのかもしれません。で
もそれでしたら寂しいですね。

私が伝えたかったのは、見返りを求める愛です。
拙い文章で誰にも伝わらなかつたかもしません。

ですが音憂ちゃんは、彼が自分を守ってくれるから、自分を愛して
くれるから、彼を好きになつた訳じゃないと言つ事です。

中々出来るものでは無いと思います。

そんなテーマで書いたのに、ハッピーホームで終わらせたくは無か
つたのです。（バットエンドとも限りませんが……）

なので、少しきなさが残りそうな終わりで外編を書きました。
2人の旅はどうなるのでしょうか。

でも2人にとって、一緒に居るだけで幸せなのだから、絶対ハッピー
エンドになりますね（笑）

読んで下さつて、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4931f/>

華の天使 月の精霊

2010年10月8日22時06分発行